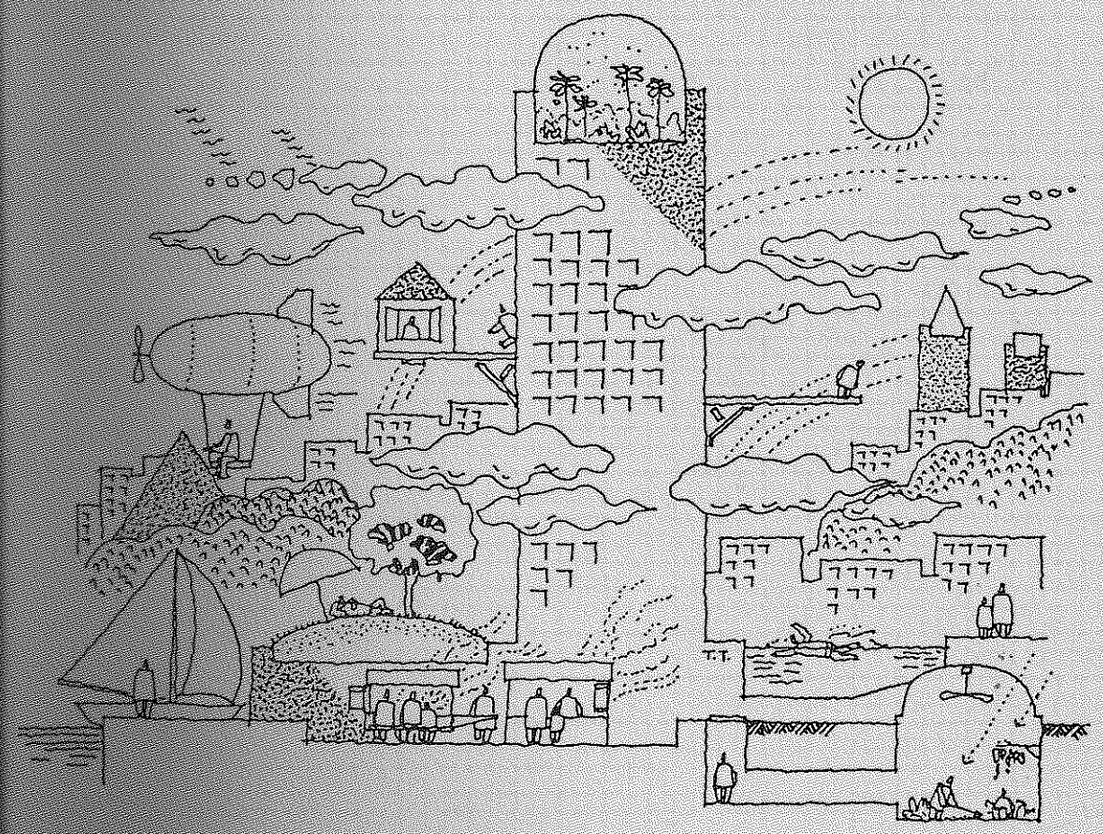
横浜まちづくり研究会
発足１０周年記念

まちづくり



１９９０年３月

なぜか『まち研』・だけど『まち研』・ちょっと『まち研』

まちづくり研究会　世話人代表　仲原　正治

１０年前の手紙にこう書いている。

『このごろちょっと自分のおかしい状態がわかります。朝、職場に行くことがイヤになって、ズル休みをとって大井の競馬場に行ってしまったり、夜になると家に帰りたくなくて連日のように酒浸りで、どこかでクダをまいている。原因はあるようで、ないようで、所詮は自分の心の問題だとは思うのですが、自分が情け無い状態にあることは確かです。

自分を取り巻く環境は、自分がいつもどこか覚めているという自覚を持ちながらも、道化なりの仕種をして自分を何かに包み込もうとしているのです。何か公務員としてのみんなが持つ共同幻想に自分を押し込む作業を自分をしているような哀しさがあります。現代の組織は、みんながそうだと思うことを覆すことは非常に難しいもので、ひとつの枠の中に入っていないと孤立してしまうのではないかという苦しみを身体で感じてしまい、どうしてもそれに身体を合わせようと動いてしまうようです。

そういう中で暮らしていると、その中で溺れている間は、何も考えずに楽しく思えてきてしまうのでしょうが、覚めている自分がいて、何故ここに自分がいるのかということを一度考えてしまうと、もう精神的には何かを閉じてしまわなければ生きていけないのではないかと思います。だからといって、そこから逃げ出すだけの勇気もなく、鬱々とした毎日を酒でごまかしている。そんな自分が今、見えています。・・・・』

何故『まち研』を始めたのかと聞かれたら、たぶん、そんな精神状態の時に職員研修所にいて、田村明氏に出会い、反発を感じながらも何か魅かれるところがあって、偶然に何かが始まったとでも答えるのではないかと思う。だからといって、その時の精神状態が今は払拭したわけではなく、相変わらず同じような軋轢の中で生きている。しかし、昔と違っている自分が今、確かにある。それは、自分で自分が見えない状況を何もしないで見過ごしていたが、見えない状況でも何かを見えるように自分で動き始めたということである。そして、自分のための自分だけでなく、自分のための他人、他人のための自分をいくらかでも意識しはじめたということではないかと思う。様々な人がお互いに影響しあって生きていることが、自分の意識の中に根づき、それを大切にしていることだと思う。

『まち研』とは、非定型流動の組織とは言えないような浮遊体である。誰に

強制されたわけでもない世話人がテーマを考え講師に交渉し、会報で会員に知らせる。出て来たい人は出てきて、話しを聞いて、話したいことを話す。都合の悪い人や来たくない人は連絡も不必要。やめたれば会報を送るなと一言電話をかければ良い。会費があるわけでもなく、会則があるわけでもない。ただ、ぶらっと来て、ぶらっと帰れば良い。その日に、ちょっと興味がわくことがあれば、会の後の飲み会兼懇談会に出て、興味ある人と興味のある話しをすれば良い。何となく問題意識のある、どこか輝いている人がいつも『まち研』には来ている。

『まち研』は誰のものでもない。自分で『まち研』を名乗ろうと思えば簡単である。『まちづくり』に関すること（森羅万象なので何でも良い）を自分で企画して、会報に載せて、参加者を募れば、それで立派に『まち研』の事業として認められる。認める人がいるわけではないが、みんなそんなものだと考えているので、暗黙の合意がある。今までもずっとそうしてきた。イミダスの編集も、ﾖｺﾊﾏ･ﾌﾗｯｼｭもＹＥＳ’ＦＭも、みんなそうだったし、今後もそうであろう。原稿を書いて『まち研』の名前を付けて掲載するのも構わない。これを書いている私も世話人代表と名乗っているが、誰が決めたわけでもないし、誰にも否定はされない。要するに主体的に動く自分がいれば、それで『まち研』になり、勝手に名称を付けることができる。

『まち研』はすぐにでも消えてしまう脆弱な浮遊体でもある。世話人がくたびれてしまったり、都合で忙しくなったりすると、会報がでなくなって自然に消えていってしまう。世話人はよくくたびれる。しかし、今までそういう危機が来ると誰かが動いてしまうのである。すぐ再建委員会などというものをでっち上げて、ニューグランドホテルのマッカーサールームを予約して話でもしようかと電話が掛かってくる。消えそうになると、自己治癒能力が高まってしまい復活する。

『まち研』は横浜市職員のためにあるようだが、それだけではない。最初は市職員だけであったが、だんだんと民間の人も増えてきている。課題も当初は市の政策中心であったが、外に出るようになってきている。要するに『まちづくり』の内容は市役所の中で留まるような小さな世界では考えられなくなっているのである。『まち』に出ないとまちづくりにならないし、また『まち研』にもならないようになっている。

こんなフワフワしたつかみどころのない浮遊体なのに、なぜか『まち研』は幻想をつくり出す。なぜか確固とした組織と間違えられることが多い。この頃特に他の自治体や民間からの声が掛かってくる。たぶん、それは、ひとりひとりの『まち研』のメンバーが輝いているからだと思う。各々が自分の仕事の場所で、良い仕事をしていて、対外的にも様々な自治体や企業の人達とネットワークを持っていること。そして『まちづくり』が好きで、特に『ヨコハマ』が大好きな人が揃っているからだと思う。結局、『まち研』は、入ってみて何となくわかってくる、不思議な浮遊体ではないかと思う。

これから『まち研』がどのように進んでいくかは誰にもわからない。それは各自の主体性が、『まち研』を支配しているからだ。あなたと私とまったく異なった位相にいても、『まちづくり』という接点があれば、それで『まち研』になる。何かを始めていれば、それは『まち研』となるのだから、ひとりひとりが違った『まち研』を持っていると考えた方が良い。そういう風に考えていただければ、非常に嬉しいし楽しい。だから明日、『まち研』という浮遊体がなくなっても、まったくおかしくない。

だから『まち研』、だけど『まち研』、そして『まち研』、どうでも『まち研』、まあボチボチ進んでいこうと思う。

最後に、田村明氏には、本当に感謝している。教えることは教わることという本当に簡単な真実、でもそれが中々できなくなっているこの頃、いつも『まち研』に出席し、それを実践していただいている。『まちづくり』のことになると、誰とでも同じように議論をして、年齢や性別、経験や信条と関係なく公平に扱ってくれる。いつも『まち研』の仲間と同じ扱いであることがあたりまえになっている。だから、心の中では『先生』であるのは確かだが、なるべく彼を『先生』とは呼ばず、『田村さん』と呼ばしてもらっている。『本当にありがとうございます。これからも、よろしくお願いします』

まちづくり研究会の十周年を迎えて

まちづくり研究会顧問（法政大学教授）　田村　明

月並みな言い方になるが、「まちづくり研究会」が今年で満十年を迎えると聞いて、随分月日の流れは早いなという感じがする。

だが、やっぱりこの十年は長かったと言うべきなのだろう。その間に、私自身の生活には大きな変化があった。「まちづくり研究会」が生まれた翌年、私は横浜市を辞めて大学に移りすでに九年の年月がたつ。おかげでこのところ自由に全国を周り、世界の各地も歩かしてもらった。日本全国のまちづくり運動うしている人々にも会った。全国の自治体の悩みや活動の実体にも触れた。そうしてみると私にとってのこの十年の月日は大きい。

「まちづくり研究会」は私が横浜市を辞める一年ちょっと前に始まった。四回続きの研修をやってくれと、当時研修所にいた仲原君に持ち込まれた。それなら、この機会に「まちづくり」を考える自主的な研究会をつくったら、ということで始まったのである。私としては横浜市を辞めようと思っていたが、最も長く十三年間も御世話になった横浜市の次の時代に、なにかを伝えたいという思いもあった。しかし、後で述べるように、それほど大それた思いをもって始めたのではなく、極く内輪にささやかに始められたものであった。いまでも小さな存在だが、それがともかく十年も続いたということは、この変動の激しい時代としては、ひとつの注目すべき事実ということができるだろう。

じつはその前にも、私はいくつかの自主的な研究グループをつくってみた。そのひとつは「横浜プランナーズ協会」というもので、横浜市にこだわらず、横浜という土地に住んだり働いたりしている人々、或いは横浜に集まり易い人々で都市のプランナーをめざす人々の集まりとして始められた。かなり入念な準備期間もあり、規約も整理して始めた。横浜市の職員と、神奈川県の職員、大学人が中心になって相談し、川崎や藤沢市など近在自治体の職員、それに住宅公団の職員、研究者、民間コンサルタントなど幅広いもので、なかには東京から来る人もいた。横浜という土地を閉鎖的な区域としては考えず、多くの人々に呼び掛けたり働き掛ける拠点として横浜をとらえた。同じような活動が各地に広がり、やがては全国のそうした小さな動きが互いに結びつくようにしたいとも考えていた。それにはいきなり全国組織から始めるのではなく、小さな拠点が日本国中の至る所に生まれて、やがて全国につながる地域中心型の組織の方がいいと思ったからである。

重要なことは、この会は主体性をもつ個人の集まりだということである。毎月研究会を開いていたが、それはあくまでも個人という立場であって、所属する組織の代表ではない。自由な立場で議論しあうことによって、新たなものが生まれてくる。

こうした個人の集まりを組織する前に、私は横浜市という組織の立場で、他の組織と連合する会議や研究会を数多く作り、さまざまな研究や提案、提案の実現まで行ってきた。最初は、指定都市の企画部門でつくっている「企画主管者連絡会議」が冬眠状態にあり、共同研究などと称して、どこかの大学にそっくり委託研究費を出してその報告を聞くというやり方をしていたのを止めさせ、指定都市の職員が協同作業によって「大都市白書」をつくった。ほぼ二十年前のことになる。それまでは自治体職員が自主的に考えることは指定都市レベルでもほとんどなかった。まして、違う自治体の職員同士で一つの研究をするということはない。自治体の立場はさまざまで幹事都市は半年交代だから、この企画は途中で何度もつぶれかかったが、横浜市がプロモーターになってとうとう実現させた。その後は、もうすこし作業を軽くできるように、その時々でテーマ別のレポートをつくる方式にしたのも横浜市の主導であった。

また、神奈川県や川崎市に働きかけてつくった「京浜工業地帯長期展望研究会」もある。小さな市町村の企画担当者で、互いに情報を交換したり、あるべき企画部門の姿について勉強しようという「都市企画会議」も組織した。また「七大都市首長懇談会」「首都圏の五首長懇談会」「神奈川県の三首長会議」などを横浜市の主唱で組織して、それらの会議の常任幹事役として、さまざまな提案や研究を行った。そのなかでも「七大都市首長懇談会」で行った自動車排気ガス規制に対する提言は、当時産業側の圧力に負けて弱まりかけていた政府の自動車排気ガス規制を、強く押し戻す大きな力になったものである。

このような自治体組織を結ぶ連合組織は、時によって社会的に大きなインパクトになることはあるが、組織を動かすのはあくまで人である。ところが、組織のなかの人々は人事異動で変わってしまうと、以前の関心からは離れる。職務として要領よくその場の問題を処理する人々は多いが、一時的に職務をこなしているだけでは、都市や自治体という極めて総合的な問題に、しっかりした考えをもち、実行力のある存在は育たない。そこで、組織を離れて主体的な個人として都市や自治体の問題を考えてゆく人々が、互いに学びあう場が必要だと思うようになった。

そうした問題意識から、前に述べた「横浜プランナーズ協会」や、他にも個人を中心とする研究会をつくってみた。「まちづくり研究会」は、その最後に私が横浜市を辞める少し前に横浜市で新人で職員になった人々の会として始まった。「横浜プランナーズ協会」のように、専門性をもちたいというものでも、外にも発信しようというものでもなく、職員だけの極く内輪の勉強会で、と

くに規約もないし、役員といったものもない。また構成員もすべて二十代の極く若いささやかな会であった。私としては、私が辞めるころ、すでに管理職にもなったり、あるていど出来上がっている人々だけではなく、これから伸びてゆくこうした人々にも心が残ったからである。

それから十年、市の立場でつくった公の組織は、私がその運営から離れて十年以上になると、その内容が変化してきたし、機能を失ったものもある。組織としての結合は、その時代の必要性により生まれるもので、機能を失ったり変わっていくのも仕方ない。しかし「横浜プランナーズ協会」などのように個人を中心とした集まりも、機能を停止したり消滅してしまった。忙しいとか、ほかにもいろいろの理由はあるだろうが、なかなか主体的な個人同士の会というのは育ちにくいものである。

ところが意外なことに、もっとも小さく限定された若い人々の集まりであった「まちづくり研究会」だけが、その後のさらに若い人々にも受け継がれて、今日まる十年を迎えるということは、考えてみると面白い現象である。組織は大きければいいというものではない。大きいものは形骸化しやすい。小さくても、そこに関心をもち愛情をもつ主体的な少数の人々がいれば集まりは続くものである。今日「まちづくり研究会」が存続しているのは、その間にかかわった多くの人々の目立たないが、地道な努力と愛情の積み上げの結果だと思う。熱心に参加しながら、その後何らかの事情で、この会に出席できなくなった人々も、この会を続けてゆく大きな力となったことも事実である。

それに、「まちづくり研究会」の面白いことは、始めは横浜市の職員に限定していた会合に、ごく自然なかたちで数人の外部の人々も加わるようになり、自主的な海外研修会もなんどか実行した。また、内輪の勉強会だから外部への発信などは考えてはいなかったのだが、用語集「イミダス」の「都市」を執筆したり、この活動が雑誌にも紹介され、各地で生まれている「まちづくり研究会」になんらかのインパクトを与え、訪れてくる他の自治体の「まちづくり研究会」とも相互刺激をするようになってきた。小さくはあっても、続けているということは、ひとつの大きな発信機能をもつことになる。

この十年間に自治体の重要性はさらに強まり、自覚的に政策の主体になる事態も生まれてきた。一方において、新中央集権主義と言われる動きも進行しているが、その反面で自治体も明らかに実力をつけてきた。現代の自治体は、かつて三割自治体といわれたような自己卑下の状況に留まってはおれなくなってきている。制度的にはさしたる改善は見られないものの、自治体の実力を強めてきたのは先覚的な首長と、その背後に、これまでなかった主体的な自治体職員が誕生し、自覚的な市民が育ってきたことによる。

こうした状況のなかで、今日では各所の「まちづくり研究会」が生まれている。それらは構成員も自治体職員によるもの、市民によるもの、両者の混合によるもの、自治体行政がかかわりをもつもの、関係ないものなど色々ある。会の名称も「〇〇塾」などというものなどさまざまであるが、個人の立場に基礎を置く研究会や活動体であることでは共通している。ようやくにして「まちづくり研究会」の動きは全国の草の根的な地域づくりの基礎として、その底辺を広げつつある。「横浜市まちづくり研究会」も、ささやかながらその動きの先駆けとして活動してきたし、また、逆に意識はしなくても、そうした全国の動きに支えられて今日まで続いてきたことも事実であろう。

四年前、このような草の根的なまちづくり研究を行う人々の広がりをネットワークし、その活動をより発展させ、学者・研究者も実務家も市民も一緒になって、自治体についての研究を進めるため「自治体学会」が設立された。私もその設立にかかわり、設立後、その代表運営委員を勤めてきた。これは、この学会員に所属するしないは別として、広い意味の「まちづくり研究会」の全国版的ネットワーク運動だし、多くの人々への呼び掛けである。私もささやかながらお役にたたなければと思っている。

私も、この十年、全国各県をまわった。たしかに、どの都市も一頃に比べると美しくなったし、自治体も役場感覚からは抜け出しかかっている。自治体職員のなかには、かなり自信をもって活動する人々も生まれてきた。都市をつくるのも、自治を育てるのも、制度や金ではない。制度や金も重要なものではしるが、それらはあくまでも手段である。“まち”をつくるのは“まち”を愛するすぐれた人々である。そうした人づくりに成功しない都市は、一時的に金が余り巨大な構築物ができても、優れたまちづくりとはならないだろう。また、人がいなければ金をかけても、本当にいい“まち”にはならない。

横浜市も３２０万人と巨大になってきたが、人口の大きさが都市の勝ちを決めるのではない。人口規模ではなく、都市はいつも人々が生き生きと生活でき、個性と魅力のあるものでなくてはならない。それをつくるのは、そこに住む市民の意識と、自治体職員や首長の質によって決まるだろう。ささやかではあっても、「横浜市まちづくり研究会」が、今後とも、自覚をもって主体的な活動をする人々によって支えられ、また次の時代の若い人々を育ててゆくことを期待したい。

まちづくりに終わりはない。まちづくりとはいつも未来に向かってのロマンをもち、それに向かって、多くの人々、まだ見ぬ未来の人々や、見知らぬ人々とも協働作業を続けていくことである。

まちづくり研究会年表

イベント行政　国または地方自治体が、博覧会、見本市、展示会、国際会議などのイベントを積極的に活用することにより、産業振興や地域振興を図ること。イベントの実施は、ヒト・モノ・情報の集積の場を積極的に創設することから、社会資本の整備に関して地域のコンセンサスが得やすく、また比較的少ない資金で地域の活性化を図ることができるというメリットがある。神戸ポートピア博覧会の成功は多くの自治体に影響を与え、各地で博覧会をはじめとする各種のイベントが実施されるイベントブームを創出する契機となった。しかし、北海道の「世界食の祭典」では、九〇億円の赤字を出したり、平成元年度は全国いたる所で博覧会が行われたため、都市の個性をつくるものとはかけ離れたイベントも多く、また運営が広告代理店へ一括して委託されてしまうなど、地域の独自性が発揮されていないという問題点も指摘されている。

まちづくり研究会（年表）

1990，3，10

年　月	まちづくり研究会テーマと講師	ヨコハマ及び世界の出来事
80'1,29 ～ 2,07	まちづくり研修（職員研修所主催） 横浜市技監　田村明氏	モスクワ五輪ボイコット・KDD 事件・市営地下鉄横浜～新横浜間起工式
3,04	まちづくり研究会の発足会議	イエスの方舟・浜幸ﾗｽﾍﾞｶﾞｽ 借金 三菱横浜造船所金沢移転決定
4,08	地区カルテ『緑区』 緑区職員　木佐森氏他	嫌煙権訴訟・横浜駅東口開発主体社長決定
5,21	金沢シーサイドタウン 港湾局　北村氏	光州事件・大平内閣不信任案可決 オークランド港と姉妹港締結
6,05	金沢シーサイドタウン現地見学 港湾局　北村氏	大平首相急死・市選管啓発ハガキ全有権者に発行。新総合計画策定方針発表。2000年の人口 314万人
7,03 ～ 04 09	第一回日本デザイン会議参加 保土ヶ谷区の将来 保土ヶ谷区　清水氏他	中野区教育委員準公選・鈴木内閣発足・金沢海の公園人工砂浜ｵｰﾌﾟﾝ
8,04	都心臨海部総合整備計画 企画調整局　浜野氏	ポーランド連帯発足・新宿西口バス放火事件・港湾局 ｺｽﾀﾘｶへ職員派遣・横浜高校全国優勝
9,04	地下街のガス爆発 消防局　津田氏	華国峰首相辞任・ ﾙｰﾋﾞｯｸｷｭｰﾌﾞ流行 横浜いのちの電話スタート
10,08	地区カルテ『中区・緑区』 中区・緑区職員	山口百恵さよならコンサート 東戸塚駅開業
11,12	産業廃棄物資源公社の意義と背景 現地見学含む　環境事業局　三橋氏	レーガン大統領誕生・横浜ﾙﾐﾈ，ﾎﾙﾀ ｵｰﾌﾟﾝ・ベイブリッジ起工式 金属バット殺人事件
12,23	戸塚地区センター利用状況 都市問題研究会	横浜新都市センター㈱創立
81'2,10	総合計画（横浜２１世紀プラン） 企画調整局　古畑氏	校内暴力史上最高・横浜文化問題懇談会が文化基金構想策定
3,12	横浜市の高速道路 道路局　山口氏	中国残留孤児来日・神戸ポートピア開催
5,14	横浜の産業構造の課題と展望 経済局　北園氏	ミッテラン政権誕生・ヨコハマウォーキング発行
7,01	文化行政と美術館 企画調整局　木村氏	パリ人肉事件・開港資料館オープン・横浜市海外交流協会設立 横浜市都心臨海部総合整備計画基本計画発表 180ha
8,13	まちづくりとは―バクダッド報告― 法政大学教授　田村明氏	三語族『ｳｯｿｰ，ﾎﾝﾄｰ，ｶｯﾜｲｲｰ』
9,24	市民が期待する広報紙とは 神奈川区　小沢氏	伊藤素子の愛と犯罪 本牧ジャズ祭開催
11,05	国際障害者年の意義 民生局　杉山氏	ハチのひと刺し(ﾛｯｷｰﾄﾞ事件) 愛称『みなとみらい21』決定

年　月	まちづくり研究会テーマと講師	ヨコハマ及び世界の出来事
12, 12	緑のマスタープラン 緑政局　内藤氏	ポーランドに戒厳令・よこはま女性の国際フォーラム開催 マニラ保険金殺人
82' 1, 29	新本牧地区計画 都市整備局　高橋氏	
2, 20 ～ 21	『まち研』合宿	ﾎﾃﾙ･ﾆｭｰｼﾞｬﾊﾟﾝ 火事・日航機逆噴射墜落・中区米軍住宅返還
4, 02	ＹＬＡＰの意義と職員の主体的参加 企画調整局　佐々木氏	フォークランド紛争・伊勢佐木町街づくり協定
	ＹＬＡＰ＝国連アジア太平洋都市会議	細郷市長再選
4, 20 ～ 5, 31	ＹＬＡＰ研究会開催（合計７回） よこはまのまちづくり 技監　田村明氏	レバノン戦争・少女の妊娠中絶前年より16％ も激増。 第１回ヨコハマどんたく開催
6, 09 ～ 16	ＹＬＡＰ開催―主体的に参加	
6, 24	土地利用の制度と問題点 都市計画局　廣瀬氏	ラジカセ騒音殺人・東北新幹線開業
7, 23	地区整備計画の作成について 都市計画局　北内氏他	歴史教科書問題 三保市民の森閉鎖
9, 29	山手地区のまちづくり 都市計画局　高橋氏他	ゲートボール殺人
11, 10	新交通システムの現状 道路局　仲原氏	中曾根政権誕生 伊勢佐木町3, 4 丁目モール完成
12, 18	地域性と空間的広がり 筑波大学助教授　岩崎氏	三年越しの不況 開港広場オープン
83' 1, 25	神奈川区のまちづくり 神奈川区　小沢氏他	中川一郎自殺・勝田事件（連続８人殺人）
3, 12 ～ 13	『まち研』合宿 テーマ　―都市ヨコハマをつくる―	三菱重工の金沢・本牧移転完了 横浜女子駅伝開催
4, 22	みなとみらい21について 都市計画局　橋田氏他	おしんドローム・区ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰｵｰﾌﾟﾝ 横浜新都市交通㈱設立
6, 08	ヨコハマの主体的経済発展を目指して 経済局　横山氏他	参議院比例区始まる 金沢緑地オープン
7, 08	横浜市婦人問題懇話会提言について 市民局　五反田氏	市高齢者社会対策研究会発足
8, 26	横浜市の老人問題 民生局　中村氏	アキノ暗殺・エイズに厚生省無対応・港北ﾆｭｰﾀｳﾝ集合住宅入居開始
10, 24	青少年に未来はあるか 駒沢大講師　汐見氏	大韓航空機墜落 ロッキード裁判田中実刑判決,
11, 28	MM21フェスティバル顛末記 都市計画局　遠藤氏他	ロッキード解散・MM21起工式 夕暮れ族摘発・フォーカス現象
12, 24	地方自治体における国際化と国際機関 （総会、公開討論会）	自民党過半数割れ 疑惑の銃弾スタート 首都高―横浜公園～新山下開通
84' 2, 21	戸塚駅周辺再開発について 都市計画局　矢野氏他	
3, 03 ～ 04	『まち研』合宿 テーマ　―土地問題と土地政策―	南部斎場地元反対決議 グリコ事件
4, 18	ファッション都市ヨコハマをつくる 経済局　田口氏	焼酎ブーム、イッキ飲み ２階建バス『ブルーライン』発車

年　月	まちづくり研究会テーマと講師	ヨコハマ及び世界の出来事
5, 30	日本丸とみなとみらい２１について 港湾局　内藤氏他	横浜こども科学館オープン まちの色彩とまちづくりシンポジウム開催
6, 29	大分県一村一品運動 余暇開発センター　橋立氏	㈱横浜みなとみらい２１発足
8, 30	横浜港と経済の結びつき 港湾局　大島氏	黒字のﾛｽ五輪・日照指導要綱緩和 投資ｼﾞｬｰﾅﾙ 事件・21面相の挑戦状
9, 21 ～ 22	大分県一村一品運動見聞旅行	帆船『日本丸』運輸省から払下げ 宅開要綱緩和方針
11, 26	大分県一村一品運動見聞記 企画財政局　荒氏他	池子問題で富野逗子市長誕生 世田谷通信ケーブル故障
12, 26	アジアの自治体は今・・・ 港南区　田口氏	ボケ老人殺人 田中角栄倒れる
85' 3, 14	ひかり号新横浜停車はヨコハマに何をもたらすか　都市計画局　土井氏他	エイズ一号認定 地下鉄新横浜～舞岡間開通
4, 25	東京都横浜市or首都横浜？？　首都圏においてヨコハマの生きる道は・・ ㈱みなとみらい２１　森氏	都心の地価年40％上昇 帆船日本丸一般公開
5, 23	ヨコハマ、鉄道、道路、空港 横浜を中心とする交通体系とは？ 都市計画局　友田氏	指紋押捺拒否 男女雇用機会均等法成立 市「文化基本構想」発表
6, 24	横浜の交通―ペナンと横浜の都市間比較による開発ｺﾝﾄﾛｰﾙと交通体系 都市計画局　金近氏	豊田商事会長刺殺
7, 31	海外レポート　アメリカ編 都市計画局浜野氏　緑政局矢加部氏	京都古都税で拝観停止 日航ジャンボ墜落
9, 30	高度情報化社会の技術 ＮＴＴ　溝尻氏	ﾖｺﾊﾏ･ﾊｲｽｸｰﾙ･ﾎｯﾄｳｪｰﾌﾞ 開催 G5で円高時代へ・横浜そごう開店
10, 12 ～ 13	『まち研』合宿 テーマ　―各自のレポート―	歴史的建築物保存のボーナス制度 いじめ１１０番開設
11, 13	自治体と高度情報化社会 ～高度情報化社会の裏表～ 企画財政局　石田氏	市人口 300万人突破
12, 21	行政計画と住民調整 ～住民説明会を素材として～ 民生局　永井氏	ファミコンブーム(ｽｰﾊﾟｰﾏﾘｵ) 横浜ＦＭ放送開始 アキノ大統領誕生
86' 3, 04	市政100 周年記念事業の戦略 企画財政局　岡村氏	逗子市会リコール成立
4, 01	そごう進出と横浜駅周辺のこれから 横浜そごう　遠藤氏	岡田有希子現象･ﾖｺﾊﾏ･ﾋﾞｴﾝﾅｰﾚ開催 ﾁｪﾙﾉﾌﾞｲﾘ 原発事故・細郷市長三選
5, 26	外食産業とまちづくり 経済局　南氏	市政100 周年「横浜・丘と海の祭り」発表
6, 27	ｲﾝﾃﾘｼﾞｪﾝﾄﾋﾞﾙと企業の情報化戦略 千代田化工建設㈱　東山氏	横浜人形の家オープン 衆参同日選で自民圧勝
9, 18	今、アーバンデザインは ～近年都市デザイン事情～ 都市計画局　佐藤氏	国際交通博ヨコハマデー 狂乱地価 社会党土井委員長誕生
10, 29	地方自治体の国際化 ～横浜と他都市の事例等～ 公務職員研修協会　又坂氏	ライトアップ･ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ開催 戸塚区分区―泉・栄区誕生

年　月	まちづくり研究会テーマと講師	ヨコハマ及び世界の出来事
11, 26	みなとみらい２１は今 都市計画局　若竹氏	防衛費ＧＮＰ１％突破
87' 1, 29	海外大学の誘致は可能か 総務局　南氏	胡耀邦総書記辞任 赤レンガフォーラム開催
3, 24	国際居住年と横浜の役割 建築局　浜野氏	売上税岩手補選ショック ㈱横浜国際平和会議場発起人会
4, 19	東京湾ウォーターフロントツアー 民生局　仲原氏他	国鉄分割・民営化 野毛大道芸フェスティバル開催
4, 23 ～ 26	『まち研』海外ツアー―ソウル編― ～オリンピック前のまちづくり～	
5, 15	今、自治体がおもしろい！ 地方の目で見る四全総 法政大学教授　田村氏	朝日新聞阪神支局襲撃 ㈱横浜国際平和会議場設立
6, 26	横浜博覧会の表・裏 人・金・事業の流れなどなど ㈶横浜博覧会協会　川口氏	ＭＭ２１新線計画発表 特養ﾎｰﾑ「松寿園」火災17人焼死 市「緑化基本計画」発表
8, 03	ＭＭ２１新線の裏を覗く 今抱えている問題点と今後の見通し 都市計画局　鈴木氏	ヨコハマ・サマー ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ開催 ㈶ｹｰﾌﾞﾙｺﾐｭﾆﾃｨ横浜(CCY)CATV 送信開始・金沢水際線公園オープン
9, 19	旧根岸競馬場スタンドの有効利用 総務局　堀氏　山手総研　寺田氏	国際居住会議―横浜会議開催 ブラックマンデー
10, 29	横浜アートセンター構想 関東学院女子短大助教授　小林氏	金賢姫の謎 横浜市道路建設事業団設立
12, 05 ～ 06	『まち研』合宿 テーマ　―各自のレポート―	
88' 1, 20 ～ 3, 23	横浜ウォーターフロント探検講座 （全１１回）	三菱地所「ﾗﾝﾄﾞﾏｰｸﾀﾜｰ」建設発表
2, 02	横浜港は今・・・ 港湾局　佐藤氏	横浜ビジネスパーク起工式
3, 11 ～ 27	ヨコハマ・フラッシュ開催 （１７日間のアートイベント）	YES' 89ﾖｺﾊﾏ･ﾌﾗｯｼｭ開催 さよなら青函連絡船
3, 15	企業サイドからの水際開発 日本鋼管　東氏	市情報公開制度スタート
4, 21 ～ 24	『まち研』海外ツアー―台湾編― ～平均地権制度とは～	アグネス論争
4, 27	横浜本牧ＣＡＴＶ奮闘記 ～ＣＡＴＶとまちづくり～ 都市計画局　田口氏他	㈱ポートヨコハマ１３０創立総会 市「歴史を生かしたまちづくり要綱」制定
6, 03	東京都のウォーターフロント開発 東京都　島村氏	リクルート疑惑発覚 海の公園海水浴場オープン
7, 21	夜遊びの水先案内人 ベイサイドクラブ　林氏他	ソウル五輪 横浜女性フォーラム会館
10, 14	国際化への挑戦―自治体編― 総務局　南氏	横浜国際平和会議場起工式
11, 22	海外長期派遣研修制度について 総務局　小木曽氏	ブッシュ大統領誕生 昭和天皇崩御―平成時代へ
89' 2, 17	ﾃﾞｨﾍﾞﾛｯﾊﾟｰ から見る“まちづくり” ～市街化調整区域の開発～ 日本環境企画㈱　清水氏	

年　月	まちづくり研究会テーマと講師	ヨコハマ及び世界の出来事
3, 14	横浜市と海外都市との技術協力 都市計画局　五島・伊東氏	ﾏﾘﾀｲﾑ･ﾐｭｰｼﾞｱﾑ完成・JR桜木町駅新駅舎開業・横浜美術館開館
3, 25 ～10, 01	ＹＥＳ' ８９横浜博覧会 『ＹＥＳ・ＦＭ』放送オンエア	YES' 89横浜博覧会開幕
3, 29	アメリカ体験報告会 総務局　南氏	ＱＥⅡ洋上ホテル開業 横浜高速鉄道㈱発足
4, 28	旭区からの発想・金沢八景のまちづくりチャレンジ　旭区　長井氏 都市計画局　松下氏	消費税スタート・横浜アリーナオープン・馬車道日本火災ビル新装 マイカル本牧オープン
5, 20	ＹＥＳ' ８９横浜博覧会速報 ㈶横浜博覧会協会　安島・出縄氏	国際青年会議所アスパック89開催 美空ひばり逝去
7, 24	鶴見区からの発想 鶴見区　高安氏他	金沢ｼｰｻｲﾄﾞﾗｲﾝ開業・世界交通学会 参院選与野党逆転・海部内閣発足
9, 06	米国留学報告会NO. 2 総務局　南氏	横浜ベイブリッジ開通 横浜博覧会閉幕1333万人入場
10, 20	横浜博覧会『ＹＥＳ・ＦＭ』顛末記 濱じゃん組　竹森・原氏他	幕張メッセオープン
11, 15	まちづくりの新たな地平を求めて ｻｳﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟﾃﾞｻﾞｲﾝ研究機構　鳥越氏	「よこはま21世紀プラン」発表
12, 14	香港のまちづくりとこれからの香港 千葉大学助手　藤原氏	MM21・24街区コンペ案発表 細郷市長不出馬表明
90' 1, 14 ～1, 17	『まち研』海外ツアー―香港編― ～返還前の香港の現状とまち～	
2, 08	居住環境整備とｺﾐｭﾆﾃｨ参加 -海外研修報告-　建築局　飯島氏	細郷横浜市長逝去 衆院選自民党圧勝
3, 10	『まち研』10周年記念フォーラム	

まちづくり研究会活動報告

アーバン・デザイン(urban design)　**都市デザイン**。地方自治体による主体的なまちづくりの手法。既成の法律・制度の枠組みにとどまらず、自治体のもっている権限と人材を総合的に活用してデザイン的にも質の高いまち並みづくりを行う。一人だけでデザインするのではなく、都市をつくる多くの主体に柔軟に働きかけ、総合的で質の高い都市環境を志向する環境デザインの代表的分野。あるべき都市像を背景に、地域の自然的特性や歴史的文化的価値などを反映させて、人間的な空間を備えた都市を実現しようとする。都市計画上の規制誘導権限を活用して公共事業、民間活力、さらに市民の協力などを総合的に結集させて企画・演出をする。小はサイン(道標や案内板など)や建物相互間の調整による壁面後退から、大は地域ごとのまちの方針づくりまで、都市の表層的なデザインにとどまらず、その前提となる都市活動も総合的に把握・企画することがその基本姿勢である。横浜市では昭和四六年から、自治体では初めてアーバン・デザインの専門家集団をおいた。

８４年度　大分「一村一品運動」

1　日　程

９月２１日　大分県地域振興課
　　湯布院町　　旅館「玉の湯」
９月２２日　玖珠町　　吉四六（きっちょむ）漬工場
　　大山町　　町役場
　　中津江村　　鯛生金山博物館

2　概要

（１）「一村一品」の本質

昭和５４年頃から大分県が提唱しはじめた「一村一品運動」は，個別の市町村が知恵を絞り展開した運動であり，県は各地の地域振興の試みを誘発し側面から援助したに過ぎない。また，単なる特産品づくりをめざすだけでなく、それをテコとした地域経済の振興を図ろうとしたものである。そして，さらに地域振興へ向けたイベント，イメージ，人材などの地域の素材を活用した「まちづくり」「むらおこし」と捉えることができる。

（２）各地の取り組み

ア　大山町　昭和３０年代から「田圃をつぶして梅，栗を植えよう」と米作や育牛からウメ・クリ中心の多品種少量生産への転換を図り「月収制農業」を確立していった。（第１次ＮＰＣ運動）この成果を受けて，昭和４４年イスラエルのキブツへの青年の派遣をはじめとする，人づくりをめざす第２次ＮＰＣ運動を始めた。彼らは熱気を町へ持ち帰り人々を啓発した。海外派遣は壮年者の中国派遣，高校生の韓国セマウル派遣と展開した。そのノウハウはその後「１．５次産業」「分工場方式」「文産団地」へと発展し，第３次ＮＰＣ運動へ続いた。これは地域を８つのブロックに分け（文化集積団地）地域施設を中心に新しいコミュニティを作ろうとするものである。これと平行して梅ハニー，味しめじ等の農産物に付加価値を付けた「１．５次産業化」を進めている。

イ　湯布院町　地理的に大観光地別府に隣接しながら観光ルートからはずれた温泉であったが，昭和４５年頃，外部資本による観光開発の動きをきっかけに「由布院の自然を守る会」が生まれ，その後それは「明日の由布院町を考える会」へ引き継がれていった。彼らは別府と対象的な「個性」を大切にした「保養温泉地構想」をめざした。今でいう「ＣＩ」の形成を図り清潔な保養地イメージ，都会的要素を含んだ観光資源の創造，積極的ＰＲを柱に構想の実現をめざした。

「映画館のない町，しかしそこに映画はある」と売り込んだ湯布院町映画祭や「小さな星空コンサート」と銘打った「ゆふいん音楽祭」などイベントの活用に優れた特長を見せた。また，地場素材の活用に積極的

であり，都会の人達から育牛の資金を集める「牛一頭牧場」や地鶏運動という地域の農業学校・農家・肉屋を経済循環に巻き込んだ運動を生みだした。

ウ　玖珠町　「一村一品」の中でも一次産品を加工した「１．５次産品化」の代表例である「吉四六（きっちょむ）漬」は，大根，キュウリ，人参などのモロミ漬けである。ボーリング場を改造した工場は民間の食品会社から農協が引き継いだものであり，昭和５３年当時の減反対策への対応として安定した生産体制を整える目的があった。それは半面雇用の創造につながった。現在でも極力機械化は抑えられ地場雇用の確保をめざしている。吉四六漬は，他の市町村の漬物類と比較して，「地産地消」を掲げ地元から浸透を図ったり，研究を重ね３種類の野菜から１３種類に種類を増やしたりして生産拡大を図っている。吉四六漬の波及効果として工場の雇用のほか，農家の収益の安定と拡大が可能となった。また工場から出るモロミの粕は良い牛の飼料となっている。

（３）　共通の特質

ア　明確なポリシー　大山町のＮＰＣ運動や湯布院町の成功例には明確なポリシーを見ることができる。しかし，それはいずれも綿密な市場調査や長期にわたる試行錯誤を経ていることを忘れてはいけない。

イ　地場の素材の活用　湯布院の牛や玖珠町の野菜は地場の素材をうまく活用している。自然条件の活用を含めて，自分達の周囲の環境に対する深い配慮が十分に払われている。

ウ　小さな経済連関の重ね合わせ　湯布院の地鶏運動や玖珠町の吉四六漬は，それのみに留まらず地域に経済の連鎖を産み出している。

エ　外部ノウハウの利用　地場の特産物を産み出して行くうえで外部ノウハウを積極的に取り入れている。湯布院の「猪鹿鳥料理」は日本全国の食べ歩きから生まれたものであり，大山のエノキ栽培は産地長野から苦労の末導入したものである。

オ　その他　イメージづくりとマスコミ活用が巧みであり，また「まちづくりは人づくり」と考え人材育成にも十分力を注いでいる。

（この項は　調査季報８４号　行政研究「大分一村一品運動の実際」を要約しています。詳細は調査季報をご覧ください）

IMIDAS執筆協力

1986年11月、集英社から最新情報知識辞典『IMIDAS』が発売された。

この『IMIDAS』の「都市」の項目を当会顧問の田村氏が執筆しているが、まち研ではこれに全面的に協力している。当初、集英社から依頼された田村氏は多忙でもあり断ろうと思われたそうであるが、まち研の存在を思い出し、まち研のメンバーが協力することで引き受けることとしたのである。このため、草稿をメンバーが分担して書き、田村氏が監修する形で毎年の出版が行われている。

初年度は全くの書き下ろしであり、項目の選定から始まり分担して執筆、内容の修正、分量の調整等田村氏のチェックを経ながら原稿づくりを行った。しかし、我々もこの種の文章化の作業に慣れていなかったこともあり、最後には田村氏に相当直され、原型をとどめないものもあった。辞典であるので、項目名を極力具体的にすること、最初に定義を手短かに述べること等田村氏の指導を受け、２年目以降は次第に慣れて来た。

「都市」は、ソフトからハードまで対象とする領域が広い。毎年新たな項目も必要となっている。メンバーも新しい言葉はないか、その言葉の一般への浸透度はどうかと普段から新聞等に注意している。また、据え置く用語でも内容に変化があれば修正することになるし、全体量との関係で手を入れざるを得ないこともある。このため、ほとんど総ての用語が毎年何らかの形で修正されている。その一方で、新語が入ることではみだす用語もあるわけで、基礎的用語が入らない点等の問題も起きて来る。『IMIDAS』が最新用語事典と銘打っている以上限界もあるのである。また、田村氏も我々も、まちづくりという観点から用語をとらえようという認識でいるので、単なる言葉の説明ではなくその内容に対するまちづくりからみた論評も入れるように努めている。

実際に原稿を書いてみると、限られたスペースで説明するのは実に難しいことがわかる。わずかな量といってもその背景も含め相当量の情報を理解していないと正確な言葉の説明ができないということもわかってきて、毎年のことながら緊張しながら書くことになる。これは良い経験にもなるのでなるべく多くのメンバーに書いてもらうようにしているが、初めて書いた場合は田村氏の手でほとんど修正されることになる。

また、各自の書いた原稿を前にお互いに批評し合うのも楽しい機会であ

る。お互いの情報不足を補い、研さんの場になる。また、自分の担当した用語が、量の調整上削除されそうになると、何とか残そうと必死の攻防が展開される。

我々はこれらの作業を通じて、日ごろ何気なく使っている多くの言葉の意味を再認識している。このような機会が得られるのもまち研ならではである。

韓国ツアー

日　程	1987.4.23 成田→ソウル 現代総合商事訪問 24 ソウル市役所、木洞事業所、漢江管理事業所、オリンピック施設を訪問 25 自由行動（国立現代美術館、中央博物館等） 26 ソウル→成田
参加者	21名

1982年に横浜で開催された国連アジア太平洋都市会議（ＹＬＡＰ）での活動や、その後のアジア部会等でアジアとのつながりの中でまちづくりを考えて来たまち研では、実際にアジアの都市を見てみたいという機運が高まっていた。これを最初に実現したのが1987年の韓国・ソウルツアーである。

翌年にオリンピックを控えた韓国は、高度経済成長のただ中にあり都市開発も急速に進められているとのことであった。そこで、ソウルの都市づくりの状況をこの目で見、また、官民の都市づくりにはたす役割等を聞いてみようという趣旨でツアーを企画した。

実際に訪れたソウルは高層ビルやニュータウンの開発が進み、日に日に変ぼうを遂げているという印象であった。市役所の訪問では、都市計画部門でまちづくりの制度等を伺った。また、韓国の代表企業である「現代」を訪問し直接会長の話を聞く機会を得た。これらの話の中で、韓国の状況が高度成長期の日本によく似ていること、土地住宅政策にかなりの力を入れていること等がうかがえた。また、根強い儒教思想の影響や南北分断の落とした影が話のはしばしにうかがえた。

朝早くから夜遅くまで、ソウルのまちは一日中にぎわっていた。近郊からバスを連ねて買い出しに来る人で早朝から混雑する市場、深夜までバスや車が流れる広幅員の幹線道路、超ラッシュの地下鉄と、すさまじい活気、熱気であった。中心街の明洞（ミョンドン）にくりだしたメンバーは、海鮮料理の小さな店でサギまがいの料金を請求され、粘りに粘って値引きさせるというハプニングもあった。

また、市内に残る史跡等に日本の統治の名残を見て、あらためて日本と

アジアの関係を考えさせられたりもした。
短い期間であったが、隣国韓国がぐっと身近になった4日間であった。

台湾ツアー

日　程	1988.4.21 羽田→台北 台北市政府都市計画處訪問 22 〃 地政處、行政院経済建設委員会訪問 23 自由行動（故宮博物館等） 24 〃 、台北→羽田
参加者	15名

第2回の海外ツアーは台北を訪れた。折しも我国では首都圏から始まった急激な地価高騰に見舞われていた。「地上げ」が流行し、土地問題は都市の発展にも影響していた。土地政策のあり方をめぐって様々な議論がなされていたが、国土利用計画法による届出といった対症的な方策で手一杯であった。

台湾では、以前から孫文の三民主義の理念に基づき独自の土地制度を実施していた。これは、地価の上昇による利益は地権者が占有するのではなく国民全体の福利向上に用いるべきだとする理念である。これを実現するために、地価上昇分を徴収する課税システムや地価の自己申告制度等が整備されているということであった。この独特の土地制度『平均地権制度』を調査しようという趣旨でツアーを企画したのである。

台北では市政府の都市計画處と地政處を訪ねた。地政處では『平均地権制度』の実態をうかがったが、制度の運用が形がい化されて来ていたり、税率が引き下げられたりと、当初の理念から後退している様子であった。台湾も経済成長により土地の資産価値が上がり、次第に制度がゆがめられているのである。地主が有利な方向に制度が改訂されているのである。しかしながら、その優れた理念や、土地に関する行政が区画整理、登記、地価公開、課税等も含め一元化されている事等見るべき点は多かった。

都市計画處では、都市計画の制度をうかがったが、日本と同じような容積制や用途地域制が行われていた。また、日本の総合設計制度を取り入れ、公開空地を確保した現代建築が増えていた。しかし、このために従来からある「亭仔脚」（一階部分の壁面後退によるアーケード）が分断されているのは残念であった。

台北のまちは周囲を山に囲まれた盆地状の平坦地に広がっている。平坦

で地形的特徴が少ないことに加えて、戦前の日本の都市計画で格子状の道路網ができており、マクロ的には地区の特性が乏しく感じられた。しかし、道は我がちに走る車やバイクで混雑し、人通りも遅くまで絶えず、特に旧来からの市街地は屋台や夜店に雑踏があふれ、活気に満ちたまちであった。漢字の看板も前年訪れたソウルのハングル文字と異なり、意味の見当もつくので親しみやすさを覚えた。

このツアーでは、テーマを明確にして、事前勉強会等もある程度行うことができ、効率良く情報が得られた。また、台北市政府や大学関係者と暖かい交流ができたことも成果であった。

［香港ツアー］

香港のまちづくりのスケールと先進性には驚かされた。香港島の超高層のオフィス街と九龍半島の超高密な住商工が混在した街という表層的なイメージしかもっていなかった我々は、エネルギッシュな街の姿と、民力を生かした積極的で知恵に溢れた果敢な都市づくりに脱帽した。

香港のまちづくりの根幹は巨大なインフラ（都市基盤）の整備である。

これから進められる最大のプロジェクトである空港移転を例にとってみると、九龍半島の飛行場を西方に移転し、そこと他の地区を環状につなぐ交通網（地下鉄・高速道路など）の整備、港湾施設の沖合への移転・強化も行う。空港近辺には職住近接を図、人口の分散を進めるためにニュータウン整備も行っていくこととなっている。

一方、九龍側の超高密市街地も空港跡地をも含め大規模に再開発する予定である。このような積極果敢な都市づくりの施策は近年稀にみるものである。

また、香港では土地が限定され、特に旧中心部では狭小な埋立地か丘陵地しか建築可能地がない。従って、計画的な開発に伴う土地の取得は困難を伴う。これをクリアするためにつくられたのがLand Development Corporation（土地開発公社）という政府と民間による第三セクターである。

香港の交通政策については、多種多様な交通手段が確実に動いているように見受けられ、先進性を感じた。

近代的な地下鉄から新交通システム。昔ながらのフェリーや２階建バス、ミニバス、さらに珍しい２階建の路面電車と乗物好きにはたまらない場所である。これらを総合的に統括している運輸局の仕事ぶりも適確なようである。

いかんせん物理的な余地がなく、新たな道路建設が難しいという。それならばと自動車への重課税で台数を押える発想もユニークである。

香港では、政庁が行う公共事業（地下鉄、高速道、埋立、ゴミ処理場等）などにも公開入札によって事業主体を民間に求め、定められた条件を満たしさえすれば施設等の引き渡しまで、工夫に応じて利益をあげることも認めている。

信託のようなものであるが、この方式も、政庁の巧みなコントロール能力と先見性があることによる。

１９９７年の中国返還にも拘らずこうした創意に溢れた積極的な都市づくりが継続的に進められるのは、“市民がいる限り都市づくりは必要”という信念による。予見されているように、数十万の人達が外国へ移住してもなお５００万人以上の住民がここに集住しているからである。

日　程	１９９０．１．１４　成田 → 香港 １５午前　香港政庁都市計画局及び運輸局訪問 午後　屯門ニュータウン開発事務所訪問 １６午前　清水建設株式会社香港事務所訪問 １７　香港 → 成田
参加者	１８名（市：１５名、民間：２名、田村顧問）

まちづくり研究会会報抜粋

みなとみらい21（MM21）

横浜市が進めている都心臨海再開発プロジェクト。昭和四〇年に、横浜市は自治体主導型の六大事業を掲げた。その一つが都心部強化事業であり、都心臨海部で操業中の三菱造船所、旧国鉄ヤード、埠頭などを移転し、跡地を横浜らしい都心として再開発するもの。新規埋め立て地（七六ha）も含め一八六ha に、就業人口一九万人、居住人口一万人を予定している。五八年に着工した。国際文化都市としての業務機能の集積を進めると共に、高度情報社会に対応した情報インフラ整備を図り、さらにみなと横浜のイメージを演出する公園や観光施設などの設置が計画されている。平成二年に日本一の高さ（二九五m）を誇るランドマークタワーが着工する予定である。平成三年には臨海部に、コンベンションセンターの一部として国際展示場やホテルなどがオープンする。総事業費二兆円、西暦二〇〇〇年の完成を目指している。

なお、昭和六三年七月には、地区内地主によって、建築物の高さ・形態・用途・新しい都市システムの利用・電波障害への共同負担などを内容とする「まちづくり協定」が結ばれた。そのための自主的運営組織として「まちづくり部会」が結成・運営される。

「街づくり研究会」の御案内

技術研修も最終日となりました。

毎回「街づくり」(都市計画・都市経営)に関する興味深い話を聞くことができましたが、反面わずか4日間では表面的、あるいは概略でしかなかったような気がします。横浜市に勤めている以上、技術・事務、ハード・ソフトを問わず、「街づくり」の課題は尽きることがないと思いますので、今回の研修を機会として「街づくり研究会」を発足することにいたしました。ぜひ御参加ください。

実施要領

- 月に一回程度の会合をもって、レポーターの提起に基づき討議する。(技監は毎回出席)
- 研修所に「自主研究グループ」の登録を行い、補助(職免、講師、資料)をうける。
- レポーターは参加者のなかで希望者が行う。(内容は「街づくり」の範疇とする〈都市計画、アバンデザイン、都市経営等〉
- 必要に応じて講師を依頼したり、見学を行う。

その他は、参加者の意向によって決めることとしたします。

呼びかけ

南(ミナミ)	学(マナブ)	環境事業局産業廃棄物指導課	671-2511
関(セキ)	寛(ヒロシ)	鶴見区役所保険年金課	503-1212
林(ハヤシ)	秀樹(ヒデキ)	下水道局 施設課	671-2850

まちづくり研究会

通信NO.22.

2月20.21日 合宿の報告

進行：参加者各自が「まちづくり」又は「仕事」についてのレポートを提出し、それについて討議する。　参加者16人 アドバイザー1人

主なレポートの項目

- 地方自治の可能性
- 地震警戒宣言発令時の市内各駅の実態調査について
- 観光からとらえる横浜
- 仕事について考える事
- 都心部の都市計画道路の整備による環境の改善について
- 街づくりについて
- こみゅにけいしょん してますか
- 区にまちづくりは可能か
- 政令指定都市横浜の矛盾
- 公務員の意識変革についてのひとりごと
- 職員の主体性の創造に向けて
- 区役所問題に関する一試論
- 老人ホームで
- 公私の機能分担論における福祉

[雑感]

☆ 問題点が様々な方向に向ってふくらんでおり、個々の問題を話合う時間が足りなかった。次回はテーマを決めてレポートし、討論するよう心がけたい。
3時30分～10時すぎまで、となりの宴会の騒音にも負けず、真面目に討論を続けた。11時から、本格的にアルコールを入れての討論に移り、早い人で午前3時、遅い人で5時半までねばりぬいた。不思議なことに、若い人から順次ダウンしてしまったようで、最後まで飲み、話していたのが田村氏だったことには、驚くとともに、若い人たちの体力のなさ、アルコールに対する淡白さを残念に思うしだいです。
内容については、あまりにも多方面にわたるので、ここでは記せませんが、資料等は用意してありますので、電話をいただければ送付します。

- 今後の「まちづくり研究会」の運営のためにアンケートを実施しますのでご協力をお願いします。
- 3～4月は事務局多忙のため、研究会は開きません。5月からは、装いも新たに（新採用職員も含め）再開いたしますのでご期待ください。
- 今回は3月27日（土）港北区で開催される「港北区まちづくりシンポジウム」のお誘いをお送りします。

港北区まちづくりシンポジウム

港北区役所では、地域に暮す人々とともに地域について話し合いまちづくりを考えていく資料として、「港北地区カルテ1981」を昨年発行しました。

しかし、実際のまちづくりには人々の協力と息の長い取り組みが必要です。

そこで、区役所ではこのたび「港北区まちづくりシンポジウム」を開催して、私達のまち港北でどのようにすれば住みよいまちづくりを進めることができるのかということについて、みなさんと考える機会を設けました。

区内の現状を紹介したスライドや神戸・横浜のまちづくりの話しを参考に、いっしょに考えてみませんか。

路地裏からまちづくりを考える

法政大学教授・港北区在住（前横浜市技監）　田村　明

神戸地域問題研究所長　宮西悠司

司会　港北区民会議副代表委員　水野次郎

3月27日（土）1：30～5：30
会場／吉田ビル3F アーバンホール（区役所隣・駐車場なし）

詳しくは、港北区役所　区政推進課　調整係　045（543）1212（内）532　まで

事務局　総務局職員研修所　仲原　671-2165
経済局中央卸売市場　南　461-1311 内226

まちづくり
まちづくり研究会・機関紙
NO. 30
1983年 1月
発行：
まちづくり研究会
運営委員会

国際的 大講演会と舞踏会

INTERNATIONAL
Discussion and party

1982 | 12 | 18 | SAT.

● PART I　Discussion ● ● ●

Theme　「地域性と空間的広がり」
ー都市デザイン的価値の延長線上に見たアジアー
Urbandesign and Asian countries

GuestSpeaker　岩崎駿介 氏（筑波大学社会工学系助教授）
Syunsuke Iwasaki
前ESCAP Chief
元横浜市アーバンデザイン担当副主幹

PM 2:00～4:00

勤労青少年センター 501 号室（野毛山研修所）
Kinro Seishonen Center

○自治体職員の役割は、その地域の多面的価値を増進することにある。～そういう意味で自治体はいい職場だ。

○「都市デザイン」とは、ひらたく言えば「まちをよくしよう、より人間的にしよう」ということだ。

○都市の美学、美しさには3つの柱がある

1. 空間造形的なもの ― 建物、道、植樹…などが相互に関係しあってその地域の特徴となる

2. いろいろな人に出会うこと ― 異種、多種なふれあい

3. さびしいところ、にぎやかなところがある

○しかし、現状にあっては地域が地域として完結せず、その産業（農業、工場、流通）はますます広域的ネットワークを拡げ、生活も当然のように地域をとびこえて、広域的ネットワークの中で成立している ― 何が地域主体の形成になりうるか

○経済的ネットワークはもとより首都圏でも完結せず、アジアを含めた世界的LINKAGE（linkid3＝結合、つながり）の中に成立する。

○経済の伸びについて言えば、伸びていくところがあるうちはいいが行きついてしまうと、伸びていった波が帰ってくるのではないか

Q. 新たな地域経済はどうしたらできると考えているのですか

A.「やること」がたいせつ。ESCAPに行ったり、スラムの子たちに図書館を作ったり、YLAPをやったり、とにかくよさそうなことをやってみている。

Q なぜ市をやめたのですか。自治体はよい職場だと言ったではないか。

A. 全部の局に関わらなければひとつの地域のデザインはできないわけで……　結局市長が代ったからですよ。

〔付録（講演レジメ・参考文献一覧表）もごらん下さい〕

まちづくり NO.42
まちづくり研究会・機関紙
1984年8月
口発行：
まちづくり研究会
運営委員会

定例会報告　6月29日（金）

テーマ：　大分県の一村一品運動
講　師：　余暇開発センター　橋立氏

講演内容

1. 大分県の一村一品運動について

昭和54年11月に平松知事が打ち上げた運動。農村工業をもってくる施策でなく、若者が希望をもって働ける産業をつくることが目的（一次産業から一・五次産業へ）
ねらいは、1.多様な産物を活かす。2.ローカルエネルギーを活かす。3.県民のやる気をおこすプロジェクトを。
具体的には何をやるか —— 県は、市場調査、ＰＲ、講演会等を行う。推進協議会による研修会etc.大山町・湯布院町など地場産業おこし。

2. その他の地域づくり

北海道釧路について —— 200 海里問題でだめになった水産資源のかわりに方法を考えだした。1.ボタ山の火力発電所。2.火力発電所の余熱・もえがらを利用した野菜工場（公社）3.フィッシャーマンズ・ワーフ（魚の消費を増やす）
沖縄について —— 船の廃油回収センターで集めた廃油とさとうきびのしぼりかすを混ぜてタドンを作り、安く発電を行う。

3. 自治体と地域経済について

自治体が直接に経済にタッチするのは難しい。自治体の政策を外からオーソライズする力が必要。行政マンが、商社マン、企業マンとなって新たに産業を作っていく。地域の経済政策がうまくいったところでは、犠牲になった産業が必ずある。

質疑応答

1. 平松知事のかけごえが何故実践につながったか？
既に大山町等の実践があった。若手の働きがあった（ムラおこし研修集会）。

2. 一村一品の効果は？
地域資源、エネルギー、Know Howを使った開発であり、落ちこぼれが少ない。

田村氏の総括コメント

・平松知事は、産業と地域を結びつけた地域経営者である。
・地域資源（地場産業、企業etc.）をうまく組み合わせていくのが地域プロデュースである。地域資源が何もないところでは、自治体職員が作っていかなければならない。自治体職員は地域に必要なことは何でもやる。
・まちをつくることが創造であるが、そのまちからさらに創造的なものがうまれてくるようなまちづくりが必要。

次回定例会

テーマ：「横浜港と経済の結びつき」
講　師：港湾局企画課　大島氏
日　時：8月30日（木）　午後6時～
場　所：教育文化センター　9階　906号会議室

○「大分県一村一品運動」見学ツアーのお知らせ
（まちづくり研究会・まち研地域経済部会共催）
6月の定例会での大分の一村一品運動の報告をもとにして、地域経済の活性化に先進的に取り組んでいる大分県の現場を見学するツアーを企画しました。大分県庁の方々との懇談会や、大山町・湯布院町などの見学を予定しております。
皆さん、ぜひ御参加下さい。

☆日程・予定
9月21日（金）午前　羽田→大分　県庁にて懇談会、湯布院町泊
9月22日（土）湯布院町・大山町見学、日田泊
9月23日（日）観光予定
☆費用　7万円ぐらい
☆問い合わせ　企画財政局資金課　荒　671－2183

○自主研に横糸を張る — まち研スパイダースからのお知らせ

秋の“自主研フェスティバル”に集まろう！

地方の時代は、自発的な創造の時代。それぞれが考えていることを持ち寄って交流することで、さらにジャンプ。トヨタ財団だって地域研究に懸賞をかけている時勢、僕ら当事者にやれないわけがない！
横浜について研究している人ならジャンルや職業は全く問いません。県職の自主研との交流も予定。来れ10月。これから始めてみようという人ももちろん大歓迎。

よこいと8月号　8月16日（木）発行

・自主研究っ子ぴあ大充実！
—— 7月発足の自主研・各区自主研20を含め総勢30に！
見やすくなります。
・秋の“自主研フェスティバル”参加予定グループ中間報告
1　大分一村一品運動ツアーに期するもの
まち研地域経済グループ　荒氏
2　市民の手作り“あざみの地域カルテ”とウォークラリー
緑区地区カルテ研究会　斉藤氏

スパイダースの活動は職員研修所承認自主研修です。問い合わせ、参加、意見等色々お待ちしています。
連絡先：企画財政局財政課　大木　節裕　671－2236

まちづくり

まちづくり研究会・機関紙

NO.68

1987年 10月

発行：まちづくり研究会 運営委員会

定例会報告

［テーマ］旧根岸競馬場スタンドの有効利用を考える
［講　師］山手総合計画研究所　寺田　芳朗氏
　　総務局横浜開港資料館企画調査室　堀　勇良氏
［日　時］9月19日（土）午後2：00から（ツアー）
　　9月21日（月）午後6：15から（討論会）

◎講義内容

1　根岸競馬場
　所在地　中区根岸台
　設計者　J・H・モーガン
　構　造　一等観覧席，二等観覧席，連絡部，下見所（パドック）等

2　他の建築物との相違点
(1)現存しているものでは最古である（一等・昭和5年，二等・昭和9年）
(2)場所自体が日本競馬場発祥の地である
(3)根岸の高台にあり遠くから観ることが出来る
　根岸＝競馬場という連想が出来る特異なランドマークである
(4)単体的価値を有している
　①外観では当時の建築の特徴を兼ね備えている
　②面白い内部空間（吹抜け等）を持っているetc.

3　その保存への問題点
　建築物として新しすぎるため価値基準がはっきり確定出来ない
　↓↓↓
　技術的には難しくないが、そこまでして保存する価値があるのか
　↓↓↓
　ファサードだけ残して建て直しても同じようなものではないか

4　残すとしたらどの様に
　○建築博物館
　○スポーツセンター
　○生涯教育センター
　○ヨコハマ国際芸術センター（アートギャロップヨコハマ）

5　将来への展望
　一等観覧席のみ残す方法が現在有力で、緑政局は11月に対象部分を取り壊す予定である。
　歴史に関して総合性＋地域性を生かすことを考慮し、もしBestの結論が出ない時“待つ”行為が様々な価値観を持つ行政各内部が出来るのか、そして後に判断を先送りすることも必要ではないのか。
　現在のアイデア不足で壊せば二度と元には戻らないものなのだから。

皆さんのアイデアを待っています。

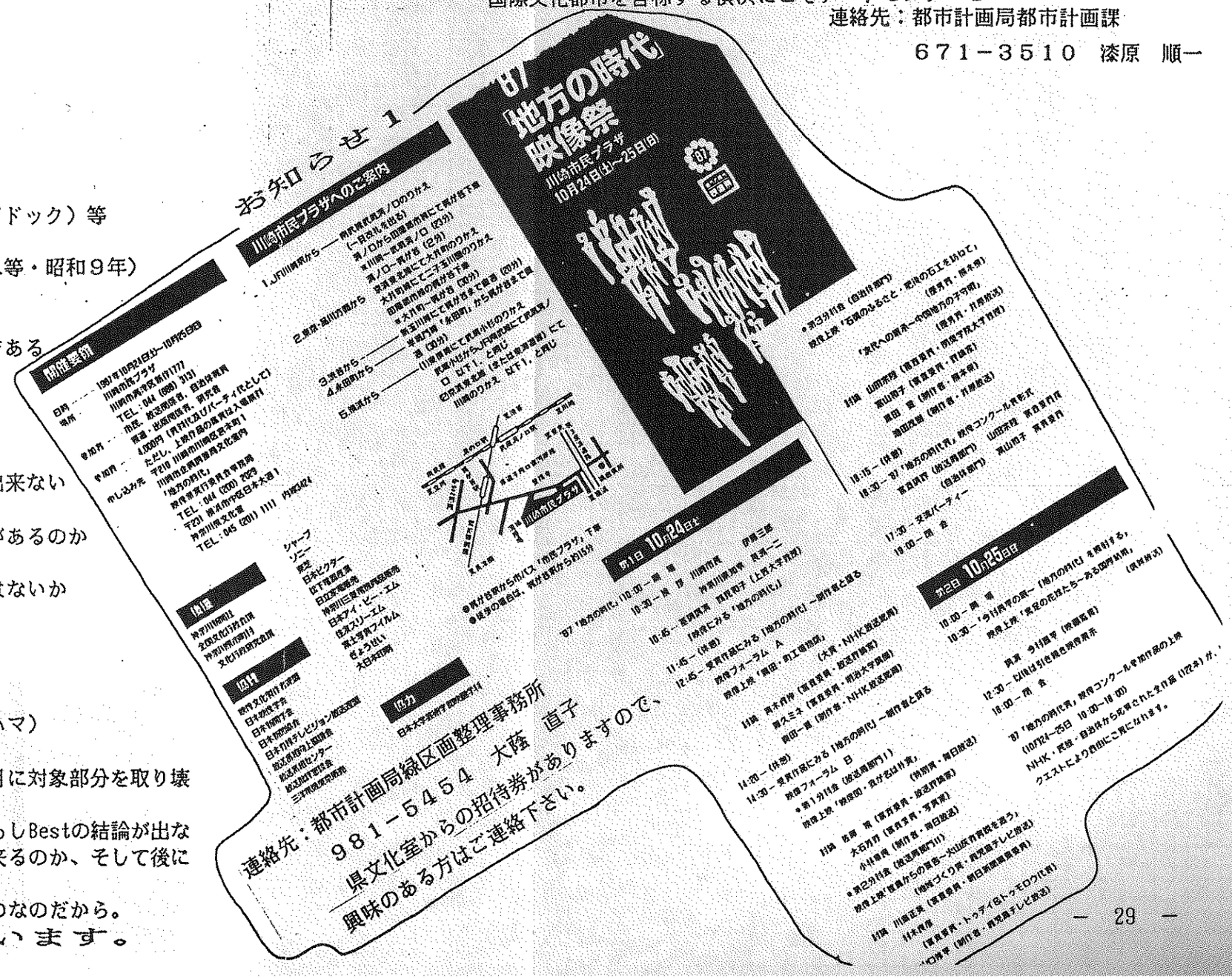
10月定例会

［テーマ］横浜アートセンター構想
　～アートセンターは横浜に・横浜はアートセンターにどの様に貢献できるのか～
［日　時］10月29日（木）午後6：15から
［場　所］教文センター908号
［講　師］関東学院女子短期大学助教授　小林　進氏

　アートセンターは、現代芸術にとって欠くことの出来ないワークショップの場を提供すると同時に、交流を企画・演出する中枢のことである。アートセンターは、横浜の国際性・文化性を実効的に高めるだけでなく、ロフト使用等施設経営に新しい可能性を提供するであろう。真の国際性・文化性は、人と人との交流によって始めて根つくもの。その交流をコーディネイトしてくれる機関・場所・そしてシステムが何より大切だ。

　国際文化都市を自称する横浜にこそアートセンターを！！！

連絡先：都市計画局都市計画課
671－3510　漆原　順一



まちづくり No.85
まちづくり研究会・機関紙　1989年12月
□発行：
まちづくり研究会
運営委員会

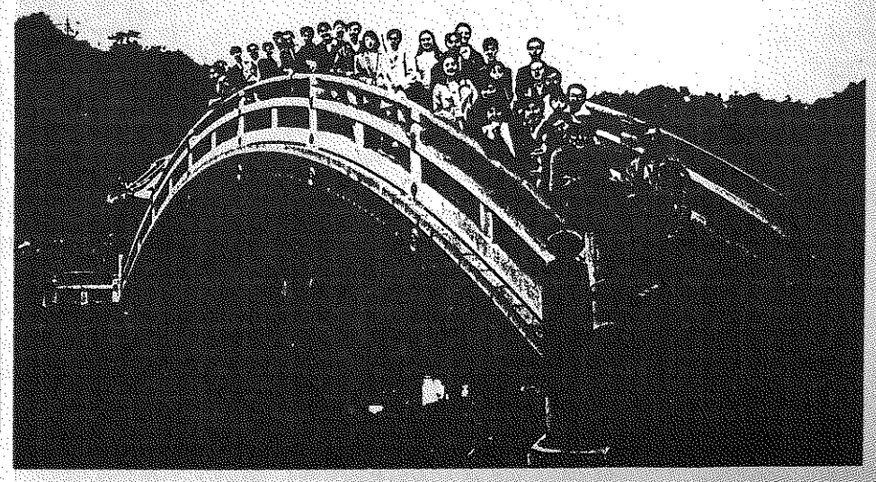
１１月定例会報告
［テーマ］まちづくりの新たな地平を求めて
　　ーーサウンドスケープの思想と
　　それに基づくデザインの実践ーー
［日　時］11月15日（水）6時15分から
［講　師］サウンドスケープ研究機構　鳥越けい子
［報　告］
１．サウンドスケープの概念
　”音”は従来、音の専門家だけのものと考えられていた。しかし、「サウンドスケープデザイン」はそういった環境音楽の１ジャンルと言ったものや、騒音行政と言ったものではない、「誰もが日常出している音」そう言った”音”について捉えることをしようとするものである。つまり、”音”を作り出すのではなく、一つの風景として捉え、それを聞く環境を創ること、または保っていくことを目的としたものである。従って、音を物理的に捉えるのではなく、人間とそれを取り巻く諸々の音がどのような関係を形成しているのか、人々がどのような音を聞き取り、いかに意味づけ、価値づけているかを問題とし、音環境を一つの文化として捉える。
　サウンドスケープの構成音には、雨や風の音、動物や昆虫の鳴き声などの自然界の音から、人間の発する音、道具などの物音、機械の音など多様多種な音が含まれる。
　「サウンドスケープ」は、複合語であり、視覚的な「風景＝ランドスケープ」に対して「耳で捉えた風景」を意味する。換言すれば音の風景を意味する言葉である。

２．神田サウンドスケープ研究会
(1)都市における音の役割
　例）神田ニコライ堂の鐘の音
　・ニコライ堂の鐘の音は、教会で礼拝が行われていることを教会に来られない人々にも伝えるもの。鐘の音は、神田で暮らす人々と地域や時代との深いつながりを支えている。
　　証言１・・・ニコライ堂の鐘の音を産湯で聞いた
　　証言２・・・子供の頃、どこで遊んでいてもニコライ堂の鐘が鳴ったらかえって来いといわれた。毎日夕方６時に鳴る時報の鐘は遊び歩いて帰ってくる時の合図だった。当時日本橋や銀座で遊んでいても、鐘の音が聞こえた。
(2)研究会の活動
　①神田での路上パフーマンス
　　時期が悪かったため行政などからの抵抗があり、うまくいかなかった。
　②神田川まつり
　③なごやの音名所
　　名古屋市内で、聞くと親しみを感じ、心が安らぐ生活の中の街の音を名古屋市公害対策局が公募したが、その審査に携わった。
　　<名所として選ばれた音>
　　・名古屋港の汽笛
　　・興正寺の鐘の音
　　・名古屋コーチンの鳴き声　　etc.１６カ所
　　これらの音は、世界デザイン博の期間中、白鳥会場でテープで流し来場者に人気投票をしてもらった。
　④横浜博音憲章
　　一、会場の音環境全体を一つの「音風景＝サウンドスケープ」としてとらえ、その味わいに耳を傾けると同時に、音の無思慮な発生により場内の音風景を破壊しないよう注意しよう。
　　二、自然の音、人口の音をトータルにとらえ、両者の調和ある音風景を味わい、創造しよう。
　　三、「音によるコミュニケーションとはなにか」その本質を考え直そう。
　　四、お祭りらしい楽しい音風景の創造に各自さまざまな形で参加しよう。
　　五、横浜の歴史の音、波の音、宇宙の音に耳を澄まそう。
　　・・・従来の視覚で捉える街づくりではなく、
　　聴覚で捉える街づくり・・・
　　世界で初めて計画された音風景を持った博覧会としての試みを行った。多くの博覧会がともすると、その場限りのお祭騒ぎとなりがちな中で、音憲章の制定とそれに基づく試みの成果を今後のまちづくりや都市計画に活かしてもらいたい。

＊田村氏のコメント＊
　１０年間まち研をやっていて９時過ぎまでかかったのは初めてのことである。それぐらい表現の難しいものである。
　「デザイン」と言えるところもあるし、言えない所もあるあるようだ。チャート（当日配布資料）にまとめてしまうと分かりやすいがトータルな話としては難しい。光のように視覚で捉えるのではなく消えてしまう音であることがなお難しくしているのであろう。名古屋の「音」の話があったが、横浜で「音」と言ったら、大晦日の除夜の汽笛や海岸教会の鐘が挙がるであろう。

＜１２月定例会のお知らせ＞
［テーマ］香港まちづくり視察関連テーマ
　　ーー香港のまちづくりと、これからの香港ーー
［日　時］12月14日（水）　午後6時15分から
［場　所］労働福祉センター　４０１会議室
［講　師］千葉大学工学部助手　藤原　恵洋氏
　来年一月に予定されている「まち研海外視察第３弾、香港まちづくり視察」を前にしての特別企画です。1999年に中国に返還されることが決まっている香港は、様々な意味で、今一番”動いている街”と言える。そんな香港の現状とまちづくりについてお聞きします。
　なお定例会終了後に中華街にて忘年会を兼ねた懇親会を行いますので是非ご参加下さい。
　　都市計画局都市計画課　漆原　TEL 671-2677

◆中野区等横浜ツアー・金沢うぉーたーふろんと編
　１１月１８日（土）晴天の下、中野区他特別区の皆様総勢２５人（４歳のお子さんも参加）をご案内致しました。
　日ごろ机の上での討論会には縁の深い我々まち研ですが、今回は実地に街を歩くことを課題としている東京特別区のまち研（事務局・中野区、他多数の区が参加しフリーカメラマン等の民間からの参加も有り）との合同ツアーを計画しました。
　用意した資料があっと言う間になくなるほどの大人数（主催の中野区の方も驚いていました）で、金沢八景駅を出発し八景駅東口周辺の開発状況から始めて、走川公園や周辺団地の道路と歩道を一体化させた歩行者空間を見学、称名寺で休憩、海の公園から八景島を望んだ後、シーサイドライン海の公園南口駅からシーサイドラインに乗車し、一路中華街での懇談会となりました。
　金沢区の仲原氏、都市デザイン室の中野氏の両名から要所要所での説明を受けながら、予定コースを無事終了。公園ではしゃいだちびさんが怪我をしたり、一時行方不明部隊が出るなど、街を歩くならではのパプニングがあったりと、賑やかなツアーでありました。後日いただきましたお礼状によると、中華街の懇談終了後番外編と称して、大桟橋その他を探検され夜の横浜を楽しまれたとのこと、あらためて「歩くまち研」のエネルギーを感じました。
　今回ご協力いただきました皆々様に厚く御礼申し上げます。今後とも横浜紹介のツアーをふくめて「街に出掛けるまち研」を計画したいと検討しております。
以上



会員からのメッセージ

まちづくり研究会

自治体職員や地域の人々がまちづくり全般に関する情報交流と人的交流、政策立案を図る自主的な勉強会のこと。まちづくりとは現場性・地域性・総合性・実践性・市民性をもつものであるという観点から、ハード・ソフトの枠を超えたものとして位置づけられ、これを担う人間形成(人づくり)を目指している。また、組織のタテ割りを補完するヨコ糸をめぐらそうとする意図も大きい。北海道の恵庭市、名古屋市の「青年都市研究会」、横浜市の「まちづくり研究会」、東京・墨田区の「ソーラーシステム研究会」など、全国的に活動がみられる。最近は自治体職員の研修の一環として、市町村が組織し援助しているものも多い。

アメリカから愛をこめて

ＵＣＬＡ留学中　　南　学

『まち研』が１０周年を迎えると聞くと、創立者としては「よくぞここまで」という気持ちと、「５年一昔」と言われるこの時代にはもう「二昔も歳をとってしまった」という気持ちが重なりあう。

すでに設立にかかわったメンバーは係長歴数年の、まさに中堅になっている。そして、自分自身で仕事を「面白く」するだけでなく、次の世代の「元気ある」職員に道をひらく役割も考えなければならないのだから、振り返ってみるとやはり１０年は大きな重みとなって迫ってくる。

アメリカから太平洋を隔てて日本を見ていると、地域性あるいは自治体であることを第一に考えながらも、もっともっと大きな視点で仕事（プロジェクト）を考えなかったら、一度しかない人生を無駄遣いしてしまうという思いがしてくる。自分の周りの人間よりほんのちょっと早く出世して肩書を得ることに満足を覚えるのも人生かもしれないが、たかが一市役所の中で肩書をちらつかせても、世間から見れば（市から発注を受ける会社は別にして）ほとんど無視される小さな存在に過ぎない。それよりも自分の全力を傾けてプロジェクトを進め、その過程で様々な人間と議論して知り合いを創るほうがどれだけ楽しいかしれない。

環境事業局、経済局中央卸売市場と、「本庁舎」意外のところで９年間過ごしていたころは、「本庁」に行けばもう少し仕事が面白く、簡単に進むのではないかという憧れがあった。しかし、総務局に来てそれは間違いであることがよくわかった。教育課にいた２年半の間にわかったことは、確かに「本庁」には仕事を良く知っている実力のある職員と、様々な情報が集まっているが、それだけでは仕事は進まないということであった。

最大の関心事は「人事」であり、出世すれば出世するだけ判断を求められることはあっても、自分で仕事を創りだすことは難しくなる。課長がやる気になればかなりの程度進むが、部長以上になると「バランス」を考えることが第一になる。助役まで出世しても、次の就職先を考えなければならないので、やはり「バランス」を考える必要がある。そして、自分の自由になる時間は確実に減っていくのである。

この現実を見れたことと、「役所」の信用力、バラエティ、そして膨大な予算をもとにした仕事の面白さを知ったことで、ジェネラリストとして出世するよりも、ある程度のスペシャリストとして仕事の面白さ、つまり人生の面白さに生きようと決心がついた。これが３０代後半になって「遅れた留学」をする

ことになった理由でもある。

自治体の仕事は必ず「役所」以外の人達と接触せざるを得ないし、また「役所」のほかの部局の人達とも一緒に取り組まなければならない。これまで、どの仕事も、自分の「外」の人との、その人々を通した世界に積極的に触れてきた。その結果、私の「名刺箱」に約８００枚の名刺が保存され、その中の３００人ほどはいつでもコンタクトがとれる程度のつきあいを保っている。この「財産」はさらに広がるのは確実であるので、ある程度自分のスペシャリティを決めれば、仕事を通した世界は無限に広がるのではないかと確信しているし、期待している。

私にとって、『まち研』は自分の世界を広げる大きな場の一つであった。これからも『まち研』が誰にでも開かれた、大きな世界の窓口の一つとして続いていくことを心から願っているし、努力していきたいと思う。

まち研10年

飯島悦郎

まちづくり研究会が活動を始めてから10周年を迎えた。私が市役所に入ったのが昭和54年であるから、ほぼ１年後に始まったことになる。この間、多くの人々としりあい様々な体験をできたことは、自分にとっても有意義なことであった。まち研の魅力、それは、通常業務ではなかなかしりえない人や情報に接することができること、立場を離れて自由な視点で考えることができること、これらのことを通じて刺激をえられると同時に、各方面にネットワークができること等である。

このようなまち研も10年間には何度かの転機があった。ここでは、運営にたずさわった立場からふりかえってみたい。

その１；批判

まち研の活動は定例会と呼んでいる会合を中心にしている。講師を呼んで話を聞き討議をするスタイルは今も変わらない。この定例会に出ていただいた講師の方から「まち研ではなく落ち研だ」との苦言をいただいた。すなわち、リーダーがいない、聞きっぱなしである、基礎的な勉強が足りない、会の目標がみえない、要するに落ちこぼれの仲良し倶楽部だというわけである。

また、月一回の定例会に対し、「間があきすぎる。」「毎回のテーマに関連性がなく、場当り的である。」等の意見があった。

しかし、私達の共通認識には、都市づくり、まちづくりにはあらゆる事象が関係し、常に幅広い視点を保っていたいという目標があった。会を通じてネットワークを広げ、お互いの仕事にいかしつつ、個人の資質の向上を図ることに重点があるのであり、その分、基礎的な部分や、特定のテーマ設定は個人の努力にまかされることになる。

その２；部会活動

そうは言っても、やはり特定のテーマについてより深い研究をしたいという有志グループもあらわれた。一つは、1982年６月にヨコハマで開催された国連アジア太平洋都市会議（ＹＬＡＰ）を契機に活動したアジア部会である。ここでは、外部から専門家を招き講演会シリーズを行い、国際化時代のアジアとヨコハマについて認識を深めた。また、地域経済に着目した地域経済部会もでき

た。地域活性化の実態調査として、大分一村一品ツアーを実現させたりした。さらには、自主研究グループ間の交流をめざす“よこいと”なるグループも出現した。市役所の中にも、かなりの数の勉強会がある。これらは、我々のように職種や年齢を問わず行っているものもあれば、専門職による業務密着形のものもあり、様々なタイプがある。まちづくりには局別縦割りではなくよこつなぎが必要であるが、勉強会も同じ事、勉強会同士の情報交換、交流を深めようという発想から生まれたものである。

その３；再建秘話

このように続けてきたまち研も、出席率がひどく落込んだ時期があった。ソフトシリーズと銘打って福祉等をとりあげた時などわずか数名しか集まらず、惨澹たる状況であった。我々の活動にとって、人集めは常に意識しなければならない課題である。というのは、ネットワークを広げ相互の交流関係の充実をするためには、裾野を広げて門戸を開いていたほうが良いからである。しかし、いくらよびかけてみても定例会に出てくれないことにはどうしようもない。この惨状を打開すべく再建委員会と称して中心メンバーが緊急に集まったことも一度ならずある。この時はいずれも、少し気分を変えるため、ホテル・ニューグランドのマッカーサールームを借りて、飲みながら、まち研の方向を確かめあったものである。多くの参加者を得ようとすれば、タイムリーで親しみやすい話題を追わなければならない。実際、再開発等のハードなまちづくりの話題はわかりやすいせいか、比較的出席率が高い。一方、テーマがホットでもそれを話してくれる人が役所の公式見解程度のカタい話しかしてくれないのではおもしろくない。なるべく、我々と同レベル、即ち一担当者としての苦労話、裏話などを含めた話をしてもらわなければならない。このような意味で、毎回のテーマ、講師の選定には頭を悩ますわけである。何やら、講演屋、セミナー屋のようである。

その４；高齢化対策

まち研のメンバーも徐々にではあるが高齢化している。発足当初のメンバーも係長になったものも増え多忙になってくる。自分達では当り前と思って話していることが新人には難解であったりして、結果的に新たな参加者を遠ざけているのではないか、高齢化、メンバーの固定化の弊害があるのではないかとの反省も生まれた。多くの参加者を得、つなぎとめることを考えると、新人にも

魅力のある会にしなければならない。後に続く世代を育てるというと生意気なようだが、ネットワークを広げていくためにも新たな参加者を確保したい。そこで、新人にもわかりやすい発言をしようと申し合わせるとともに、新人勧誘を行うことにした。まちづくりに興味のある職員のほりおこしである。実際、ヨコハマが好きでヨコハマを良くしたいと思っても、巨大な組織に埋もれてしまい、必ずしも思い通りの機会が得られるわけではない。そういう職員をほりおこし、ともに学ぼうというわけである。ここ数年は、４月または５月に新入職員向けのテーマを設定し、新人勧誘を行っている。これは同時に、新人のフレッシュな感覚で高齢化するメンバーに刺激を与えることにもなる。

というわけで、山あり谷ありの運営であったが、そこに楽しみもあり、これだからやめられないまち研である。

お役所組織とまちづくり

㈱横浜みなとみらい２１　田口　俊夫

役所組織はまちづくりに向いていないのでは、と時たま考え込んでしまう。まちづくりとは複雑多岐に渡る分野の事柄や人間たちを総合化して、戦略的に動かすことと理解している。それが役所の縦割り組織では対応しきれない。組織構造が縦割りだけでなく、職員意識も縦割りであるのが大きな問題である。なかには未だに上意下達の職員倫理感にこだわっている人達もいて、仕事を対等な議論を基に進めるという意識に乏しいことも多い。職員レベルでも、たまたま担当した職務の中に、蛸壺的に埋没して、他分野との連携を考えようとしない傾向もある。経験と学習に裏打ちされた的確な判断力を有するのが組織の幹部職員で、限られた担当分野からでも常に広い発想を心掛け、進取の精神を持つのが若手職員だとすれば、当然オープンな議論が可能なはずである。進取の職員を許容するということは、人の多様性を認めるということであり、型にはめないことである。管理することにのみ汲々としているのが今の組織体の現状である。組織とは、仕事を総合的かつ戦略的に進めるものであるとするならば、今の構造はそうなりきれていない。

役所組織は意外と地域にこだわらない。横浜市（ 431㎢, 320万人）といっても広く、個別のまちづくりは比較的小さな地域に限って進められることが多い。その時、地域にこだわらない役人意識が見え隠れするのである。たまたま担当になったからとか、いやいや担当している職員も少なからず存在する。まちづくりへの影響を受ける地域住民の「顔」を見ずに、仕事を機械的に進めることも多い。これでは住民の生活実感に即してまちづくりを考えることはできない。行政施策は地域住民の多様なニーズを的確に把握することが前提となる。仮に地域の中に多種多様な意見を持ったグループが存在するならば、その人達の意識を進んで理解することが求められる。これらの接触の積み重ねから、住民の立場に我身を置いてまちづくりを考えることができていく。役所は常に「公平なる調停者」という独善的意識でなく、一人の生活人としての意識から物事をとらえる姿勢が求められている。これさえ今の役所の組織の構造の中では不可能なことかもしれない。謙虚に人の話しを聞き、真面目に議論する姿勢が求められている。

こうした膠着した組織の中では、動けば動くほど反発を招くことが多い。しかし、やはり動いていないと何も変わらないのは確かなことである。信念に基づいて行動するならば、何かがひらけてくる。そのためには、それを一緒に進めていく横に繋がる仲間を持つことが望ましい。『まち研』の会員には、そういう信念に基づいたネットワークを望んでいる。

「まちづくり研究会事務局として
ーー　ネットワーキング→まちづくり　ーー」

漆原　順一（都市計画局都市計画課）

私が横浜市に入ったのは三年前であるが、「まち研」にもそれとほぼ同時に参加している。配属間もない頃、新入職員研修の担当講師であった田口氏から「イミダスの文章を書いて見ませんか」という誘いを受けた。自分の書いた物が出版物に載ると言う魅力もあったが、社会人になり「知らない世界、新しいことに挑戦し、多くの人と出会い、その中で自分を磨いていこう」という気持ちがあったため、引き受けさせて頂くことになった。やがて、定例会に出席しているうちに「事務局をやってくれませんか」ということになってしまったのである。

こうして、三年間が経とうとしているが、事務局にとって一番気を使うのは、定例会の参加者の確保である。まち研会員は現在、約１７０人おり、毎回の定例会の参加者は普通２５～３０人である。しかし、定例会でとりあげるテーマによって、その数がかなり違ってくるのである。このテーマは、まち研のコアメンバーで決めているが、「まちづくり」として取り上げるべき話題と、集客性のある話題とは必ずしも一致せず、せっかくお願いした講師にも申し訳ない。それゆえ、毎回のテーマを決めるのに、たいへん苦心している。

そういった中で、特にこの三年間で、好評であったものの一つに「旧根岸競馬場スタンドの有効利用を考える」というテーマがあった。これは、「横浜山手の根岸森林公園（根岸競馬場跡地）にある旧競馬場スタンドは、わが国初の競馬場施設であり、ランドマークとして独特な雰囲気を醸し出すとともに、付近の人々に愛されている。米軍による接収の解除に伴う利活用方法が検討されたが、跡地利用のため、全面的な取り壊しという事になりそうである。そこで、我々”まち研”としても、その危機から救うため、有効な活用方法を考え、提案してしまおう。」と言うものであった。実際には、二棟ある内の一棟しか残こらなかったが、まち研の見学会を企画し、そこに立ち、目の当たりにした時には、その気持ちがよくなるほどの広さに、「空間の存在」と言うものの素晴らしさを感じていた。

一方、この三年間には、こうした定例会以外にも、「国際居住会議＝横浜会議」や「ＹＯＫＯＨＡＭＡ　ＦＬＵＳＨ」（別項参照）、横浜博覧会でのミニFM放送局「ＹＥＳ　ＦＭ」、「海外まちづくり視察ツアー」といったイベントの企画や協力、参加などもあった。

このような、定例会や、企画に参加することによって、ふだん仕事の中だけでは、決してつながりの持てないような人との出会いが生まれてくる。こうした、人と人とのつながりによって、まち研がつくられているのである。

様々な人との交流を通して、一番感じられるのは、巨大組織の中での「仕事」というものは、必ずしもシステムという意味の組織だけで進められるのではなく、フォーマルであれ、インフォーマルであれ、人と人のネットワークが横糸となり、潤滑油となって動いているのだと言うことである。まちづくりにおいて、こうした、横糸や潤滑油となったり、あるいは起爆材ともなるような、ネットワークを創っていくのが、事務局の仕事であり、まち研の役割の一つでもあると信じている。私自身、人と人のつながりを大切にしているし、それによって生まれるネットワークを「まちづくり＝仕事」に活かせるよう努力して行きたいと思っている。

「まち研と総合的なまちづくり」

石　田　　正（都市計画局企画課）

私が、“まち研”に最初にであったのは昭和５６年ころだったと思う。

当時、市から東京の財団法人日本都市センターに研究員として派遣されていた私が、土地問題の研究会で委員長をつとめていただいた田村さんに、――そもそも田村さんと知り会えたのは、都市センターに派遣されてからであり、市にいた時の私には教育委員会の人事労務セクションにいたこともあって田村さんは「都市を計画する」という雲の上ならぬ本の上の人だった。――研究会の打ち合わせの後、『今日青山で横浜の若い人達と泊まり込みをするんだけど、一緒にどう？』と声をかけられたことがきっかけであった。

そのときは、なんとなく付き合って、集まっていた人達がレポートし、発表していたことにコメントを求められたりした程度であった。

その後、５８年に市の企画調整室に帰任してから上司に“まち研はオチ研だ”（落語研究会ではなく、おちこぼれの集まりという悪口である）という人がいたりもしたが、当時の私は２，３度講師で呼ばれたりもした。

最近では、アジアツアーには毎回参加したり、雑誌へのまち研紹介の掲載などのお手伝いをしている。

数年間、つかずはなれず、組織としてのまち研というより、そこで仕事で頑張っている人達とのお付き合いが続いているといった方が実にあっているように思える。

それは、ちがった見方をすれば“お勉強だけの受け身の集団”といわれながらも、単なるチャージでなくそこでのストックを仕事で生かすことのできる人達を生み出すことができてきたということではないかと思う。

よく言われるまちづくりの総合性とは、単なる個々の要素の総和でなく１＋１＋１が３でなく５にも１０にもしていくことであろう。

まち研での学習やネットワークが、総合性をもったまちづくりという仕事に生かされるとするならば、そうしたまちづくりへの視点をもち、日常の仕事（与えられた仕事という狭い意味ではなく）においてもそうした意識をもつことが必要条件ではないかと思う。

そのような、人のネットワークが広がることを期待したい。

まちづくり研究会１２０％活用法

港湾局山下ふ頭事務所　遠藤　博

〔交流する〕

『まち研』。変わった集まりである。月１回の定例会を開催し、横浜市政の様々なセクションで行われている事例について直接の担当者に話しを聞く。この定例会だけが決まっていて、ルールなど何もない緩い集合体である。『まち研』を捉える上でのキーワードはＮｅｔｗｏｒｋである。日常的にはバラバラに仕事をしている人達の間に「よこいと」を張り、交流する。『まち研』はこのＮｅｔｗｏｒｋの上に様々な可能性を秘めている。

〔考える〕

多様な部門の横浜市職員などが集うことによって、ここから自分に関心のある領域について小さな勉強会を始めることができる。共に考え自分自身を高めていくことが可能である。まちづくりの情報を得るための読書会から、テーマ研究を行う研究会まで、そのグループの可能性は限りがない。『まち研』のなかにもＹＬＡＰを前後して活動していた「アジア部会」や地域経済面に着目した「地域経済部会」などがあった。

〔歩く・出会う〕

横浜市以外の都市を訪れ、そこで実際に『まち研』を歩き、まちづくりをしている人達に出会って見る。そこから見ると以外に今まで気づかなかったことを発見することがある。「一村一品」の大分ツアーやソウル・タイペイ・ホンコンの海外ツアーを通じて得られた体験は数多い。

〔発表する〕

『まち研』の定例会は発表の場である。自分達が勉強会や研究会で討議してきたことを改めて『まち研』で発表することによって、より質を高めていくことができる。仕事の区切りとして自分の担当している事業についてまとめ発表することもできる。このほか「調査季報」の行政研究や「公務職員研修」などのメディアへの投稿も自分の仕事を振り返ってみるにはとても良い方法である。

〔実践する〕

勉強会や研究会で得られた知識は実践の場で活かされ確かめられて初めて意味を持つ。実践することによって自治体職員は「まち」というフィールドを持ったプロフェッショナルたりえるのである。〔交流する〕〔考える〕〔歩く・出会う〕〔発表する〕ことのすべてが〔実践する〕ことによって「まちづくり研究会」は１２０％活かされていくことができるのである。

すべて『まち研』のおかげです

緑政局緑化推進課　　内藤　恒平

１　『まち研』との出会い

『まち研』との出会いは、1981年12月12日、『まち研』16回目の研究会で「緑のマスタープラン」について報告したことからです。

とおり一遍の説明を終えて下がろうとした私に、田村さんは「プランはわかったが、これから君たちはどうやって実現していくつもりなのか。そこを話してくれなければ」と言われました。

戦略について話しを始めたが、これといった策があるわけではなく、「あらゆる機会を捕らえて努力していく。」という議会もおどろくような抽象的な表現をしてしまい、自分自身恥ずかしい思いをしました。

うまく話しができなかった恥ずかしい気持ちで二次会に出席した私に、田村さんや出席者の皆さんはやさしいねぎらいの言葉をかけてくれるとともに、楽しい、あくなき議論を続けていくのでした。この楽しい雰囲気に魅せられて毎回参加するようになりました。

この後、戦略について考え、どの地域の公園から優先的に整備を行うべきかを明示する「公園候補地調査」をつくりだせたのも『まち研』での議論があったればこそと思います。

２　講演の楽しさを知る。

『まち研』での２回目の報告は、港湾局に異動した1984年 5月30日「日本丸とみなとみらい２１について」で、帆船日本丸の横浜誘致とみなとみらい２１の公園緑地について、同じ局の二人で報告をしました。この時聞いていた女性から「ふだんろくでもないことしか言っていないのに、今日はずいぶんいい話しっぷりだったので見直した。」と言われ、すっかりその気になって、いろいろな場面で講演したりして話す楽しさを覚えました。

３　結婚・これから

カミさんとの出会いも『まち研』で、会員同士の結婚第一号だそうです。いま、６歳の娘と３歳の息子がいますが、１０周年を迎えた『まち研』がさらに飛躍を遂げながら、長く続いて「親子２代のまち研」になってくれることを願っています。

『まち研』１０周年によせて

市民局勤労福祉課　内藤（四夷）恵子

１０周年おめでとうございます。

もう６年近くも間接的にしか参加していない御無沙汰会員ですが、一言。『まち研』創設者のお一人、研修所の大先輩N氏に連れられて初めて参加して、横浜市役所というところには、なんて面白そうな仕事がたくさんあるのだろう！なんて優秀な人材が存在あるいは潜在しているのだろうか！と驚きとある種の興奮を感じたのがつい昨日のことのようです。

各セクションで真面目に仕事をしておられる先輩方のレポートがとても新鮮で面白かったばかりでなく、参加者の違う立場からの物の見方や意見、そして田村先生の解説や批判などが、その都度とても刺激的でした。

必ずしも今はそれぞれの力を発揮する機会に恵まれなくても、いつか、やりたい仕事が手がけられる時が来るという希望を感じ、また、人と人との素晴らしい出会いやネットワークができて、とても元気のでる会でした。

その会の魅力は変わらず若い人々を引きつけ続け、１０年になるのだと思います。

私事になりますが、およそ独身がふさわしいと言われていた自分が、妻となり、２児の母親となるきっかけも『まち研』にあったことを思うと、やはり『まち研』あっての今の自分かなっと感謝しています。

きちんと物事が見え、自分の立場で意見が言える、そんな先輩方の後に続き、また後を続けるべく時間の許すかぎり、これからも係わっていきたいと思います。

都市の課題の変化と『まち研』の役割

都市計画局企画課　五島　哲男

1　見えにくくなった自治体の課題

国際化、高度情報化、高齢化への対応ということが多くの自治体で、これからの課題として取り上げられている。たしかにこの三つのトレンドは、日本が直面している重要なものである。そしてこの流れに対して自治体がどのような政策を打ち出すかということが、これからのそれぞれの都市の発展に大きな影響を与えるだろう。

しかし、この三つの課題を人口急増期の自治体と比べると、その抽象度が高いことに気づく。人口急増期の課題は、学校の建設、ゴミ処理工場の建設、水道の供給能力の向上等具体的で、自治体の仕事として分かりやすいものだった。言い方を変えるなら、この時期は問題が具体的な形をとり、その解決を自治体に迫っていたのである。

考えてみると、国際化、高度情報化、高齢化というのは課題でなく、トレンドを表しているにすぎない。従って、かつての人口急増というトレンドとこれらの三つのトレンドが対応するのである。それでは人口の伸びに応じた公共施設の整備というかつての課題に対応するものはなんであろうか。国際会議場、ＣＡＴＶ、地域福祉システムの整備等々様々な施策が打ち出されている。しかし、これらは施策であって課題ではない。

もう一度人口急増期と比較すると、かつては人口急増というトレンド、公共施設整備という課題、そして具体的な施策があったのに、現在は三つのトレンドと具体的な施策が示されているだけである。

2　課題設定が必要になっている。

三つのトレンドは、都市を大きく変えるだろう。しかし、このトレンドの中で都市の姿や昨日がどのように変化し、何が当面取り組むべき課題になるのかは明確でない。従って今、自治体職員、あるいは都市のあり方を考える人間に求められているものは、課題を設定することなのである。これは自治体が解決しなければならない問題ですよ、と外部から突きつけられ課題に対する施策を作ることだけでなく、大きなトレンドによって生じる変化のうちから自治体が取り組むべき課題を設定し、それを課題とすることについて市民の合意を形成することが求められている。

もちろんこのことは、自治体に課題として取り上げるように迫ってくる問題がなくなったことを意味するのではない。地価高騰により、首都圏ではほとんどの人にとって住宅の取得が絶望になり、東京を含め首都圏の都市の発展に歪

みが生じているという大きな課題を多くの都市が抱えているが、これについてはここでは触れない。

3　自治体職員に求められるもの或いは都市を考えるときに求められるもの。

課題を設定するのには、与えられた課題に対する答えを見つけるのとは別の力が必要である。より広く、より長期に社会構造の変化を見通すことが課題設定には必要である。

さらに、都市がより広い範囲から影響を受けるようになったことも考えなければならない。三つのトレンドの一つである国際化を例に取り上げよう。従来横浜の発展戦略を考えるときには、東京からの影響、首都圏の都市との競争関係くらいを考えていれば良かったが、今では、シンガポールやホンコンとも国際的イベントに関して競争関係にあることを考えなければならないし、横浜の地価高騰がバンコクの生産機能拡大に結びついていることも考慮しておかねばならない。自治体職員は、時間的、空間的にもっと遠くまで見なければならない。

他方、自治体で働くことのメリットである、住民や企業との日常的な接触の中から問題の具体的な形を見つけ出す重要性も依然として失われていない。つまり、一方では国際レベルでの変化を見通し、そしてその変化と毎日の住民や企業との接触の中に現れる個別の具体的な問題とを結びつけて理解することが要求されているのである。しんどい話しである。

4　『まち研』が果たすべき役割

このしんどい状況をこなして行くには、さしあたって仕事の中では会えないような分野の人と意識的に会い、直接は仕事に生かせないような情報を仕入れておくことと、日常的にぶち当たる問題を表面的に処理するだけでなく、それを発生させている構造までも読み取ろうとする努力が重要である。

『まち研』は役所の内部の勉強会からスタートし、最近は企業の人との情報交換にも力を入れ始めている。このような情報源を拡大する方向を強化し、なおかつそれが雑多な情報収拾に終わるのではなく、だんだん時代の変化の構造が読めてくるようにする、という大変高度な役割を『まち研』に求めよう。

もっと遠くまで、もっと未来まで見通し、研ぎ澄まされた感受性を持って日常的な個別の事象に対応できるようになるため、『まち研』を使っていこう。

『まち研』なんてもういらない？

都市計画局都市デザイン室　　大蔭　直子

『まち研』１０周年との事であるが、１０年！も続いていた集まりなのかと思う次第で，今ひとつ実感がないというのが、正直な気持ちである。

市の内で、何かの話しのついでに、「まち研が・・・」という言葉がでると、たいていの職員が部署・年齢・性別を問わず、わけ知り顔になる不思議さと、何らかの暗黙の了解があることに気がついたのは、私が『まち研』に係わり始めた３～４年前のことになる。では『まち研』て何なのかというと、やはりサロン的お集まり会という事か。１０年も経っていながら、未だ発生当初のメンバーが中心的に会を引っ張る立場にある。また１か月に１度の定例会と称する会合も、ただ単に講師の話しをうかがうだけの会である。メンバーの話しを言えば、若手のメンバーがいないわけではない。それぞれの職場での活動や他都市との交流を考え実行しているメンバーも勿論いる。定例会について言えば、発生当初の意識として、まずまちを知るという情報収集・交換の意図があったとも聞く。それは現在も変わっていないことは理解している。

そこに物足りなくはないかという疑問がでてくる。これだけの組織（？）を運営していくこと。単に拝聴する立場だけで良いのかということ。傍観者から当事者へ意識は発生しないのかということ。しかし、これが１０年も続いてきた理由の所以であろうとも考える。何とはなしに、意識を同じくする大勢の中にいるという安心感と充足感。これに総てが集約され、そこから『まち研』が始まっている。キッチキチの現代の中で、何とも貴重な『集まり』なのだろうか。

今一つの疑問として、『まち研』の講師の顔触れは、どうもハードな都市計画関係に偏りがちではないかという事である。『ひと』で『まち』は造られていて、けっして『まち』が『ひと』を造るわけではないと思いたい。（もっとも昨今のシティライフと言う言葉の響きは、その街に合わせた暮らしをしようというニュアンスを感じさせるものではあるが。）もっと、『ひと』を意識した活動を展開しようではないか。そして単に集まって終わりという「まち研なんてもういらない」を合言葉に、一人一人が造り出す『まち研』になろう！！

『まち研』と私

西区総務課　　大島　昭宏

学生時代、環境問題に関心を持ち、水俣へ行きました。地域再生のための有機農法による甘夏みかんづくりを手伝いながら、いろんな人に話を聞きました。沖縄では老人がのんびりとくつろいでいる縁側のすぐ上を米軍の戦闘機が轟音をあげて飛んでいく姿や、住宅地のすぐ裏山に訓練用の爆弾を打ち込んでいる様子（２か月に１回行われている）を見ました。そして、問題を自分の問題として考えるため、やはり自分が住み、将来自分の子供が育つ街で、地域の問題に取り組もうと思い、市役所に就職しました。

ところが、配属された区役所の統計の職場では、毎日１プラス２マイナス１というような人口統計の足し算、引き算の連続。そしてその簡単な計算さえ、間違える私。就職前になる程度予想していましたが、こういうことをあと３～４年続けるのかと思うと目の前が真っ暗になりました。そんなとき、恐る恐る『まち研』に顔を出して見ました。何回か飲むうちに、まちづくりは、単に建物や道路をつくることだけでなく、住んでいる人々や文化的な側面、そして環境も含めた総体的なあると教えられ、区役所にいてもいろいろ考えることはあるなあと、希望を持つことができました。学生時代、一時期、貿易会社で働くことを考えていました。市役所で働くことは、物理的に活動の範囲は狭くなると思っていましたが、逆に自分の世界が拡がったと思っています。

また、『まち研』を通して様々な機会に恵まれました。韓国のソウル市役所都市計画課を訪問し、学生時代に訪れた韓国を違った視点から見ることができました。その他、国際居住年会議に伴う勉強会、そして就職と同時に半ば諦めかけていた留学の夢。

『まち研』の活動を通して得たことを、少しでもこれからの自分の仕事に活かしていきたいと思っている今日この頃です。

祝・・・『まち研』１０周年

都市計画局企画課　土井　一成

現代的ネットワーク組織の老舗、まちづくり研究会の１０年間の活動に敬意を評するとともに、今後のさらなる発展を祈って、乾杯！

私は年に１～２回しか姿を見せない幽霊会員である。それにも係わらず、毎回きちんと機関紙を送っていただき、運営委員の人達には感謝の言葉もない。

1980年４月に横浜市に入り、その年の夏からまちづくり研究会には参加している。つまり、私の公務員生活もまちづくり研究会とともに１０年を迎えたことになる。この間を振り返ると、ほんの短い時間に感じるが、個人的には結婚をし子供も２人できたし、初々しい新人職員もいつのまにか口うるさいベテラン係長になってしまっている。横浜のまちづくりも同じように1980年３月末日の三菱重工との協定締結で本格的にスタートしたみなとみらい２１事業をはじめに、人口３２０万人の巨大都市として様々な展開を見せている。１０年ひと昔、思いのほか世の中の速度は速いものである。

昨年１１月９日、ベルリンの壁が崩壊した時、たまたま海外研修でヨーロッパに滞在していた。ブタペストのホテルのレストランで、パリのカフェで、現地の人からＥＣ統合やドイツの再統一について、そして日本の輸出攻勢や海外不動産投資について意見を求められた。なんとかアルコールの勢いとへたくそな英語で切り抜けたが、この歴史的な瞬間から世界の動きは更に加速度的に速まっており、２１世紀に音をたてて突入しようとしているようだ。

これまでの既存の座標軸が大きく揺れ動いている現在、何を行うにも個人個人がしっかりと足もとを見つめ、アイデンティティを確認することが重要になると思う。自分自身、家族、住む地域、都市ヨコハマ、日本、アジア、世界・・・自らの立つ位置を明らかにする努力が必要である。そして、これまでの「草の根」のように単に下のレベルから連帯して根を張るばかりではなく、個人から都市、都市から世界へ、などといったような意識レベルの大ワープを行えるスピードを持つことが求められてくるだろう。

わが国のまちづくりの状況を振り返った場合、不毛の土地政策と民活都市開発の競争状態の中で、アイデンティティの基礎となる「住む」という行為は無視され、「都市の個性」はしだいに消滅し画一化されている。また、具体的なまちづくりの事業についても、都市問題へのアプローチというよりも金銭的価値があくまで重視され、また、様々な情報の坩堝の中でかえって物が見えず、アジア、世界の中での時代的価値はほとんどかえりみられない状況ではないだろうか。このようなまちづくりはいくら研究しても仕方ないだろう。

以上、これからの『まち研』に求めたいものは、情報活動だけでなく、会員個人のアイデンティティある生活観や仕事観の表現としてのより地に足のついた議論と、それに基づくネットワークの再構築、そして個人―都市―世界という縦横無尽のワープ活動である。また、さらに会の中核となってきた仲原氏や田口氏らも１０年の年齢を重ねてきたので、思い切った若い感性の参加により会を揺るがす刺激を期待したい。

新人感想

鶴見区戸籍課　鈴木　政憲

横浜市役所に入って、早くも一年が過ぎようとしている。（『まち研』には１年半になる。？）新人職員としては、日常業務を人並みにこなすために、毎日てんてこまいである。従って、言い訳になってしまうが今年度の後半は定例会にも不参加が多くなってしまった。（世話人の方々には御迷惑をおかけしました）戸籍係に配属され、直接まちづくりと結びつかない職場で、当時はちょっと残念でした。人々の生活をこうも管理すべきかなとも思うが、戸籍は、公共の福祉や税金等の地方自治体の基礎となる住民基本台帳の土台となっているのである。機関委任事務であり、すべてが細かく規定された職場ではあるが、横浜市地方自治の土台として、また窓口での多くの市民との触れ合いを大事にして、これからもしばらく戸籍係で頑張ります。皆様よろしくお願いいたします。

東欧小報告

総務局行政管理課　　山梨　竜一郎

『まち研』の１０周年おめでとうございます。

私は、１９８９年の暮れから今年の正月にかけて訪れた東欧の様子を述べたい。

まず、東ベルリンでは、西側を訪れようと「壁」の前に列をなして出国許可を求める人々が目を引いた。

深夜のブランデンブルク門を東側から見た。厳寒だというのに、門の周りに若者がたくさんたむろしている。よく見ると西側への出国手続きも行われていて、その前に並ぶ者もいる。西側からは壁を「採掘」するハンマーの音が響く。昨年の話題をさらった「壁」を砕くこの槌音！ベルリンの人々の心の痛みを凝集したような音が寒空に響くのは、その後もなかなか耳を離れなかった。

次はライプツィヒ。「第九」を指揮したクルト・マズア氏への惜しみない拍手を耳にした後、新年を祝う街じゅうの打ち上げ花火を見ていると、東ドイツの人々にとって９０年代にはたいへんな期待が寄せられ、いつもの新年とは違う思いを味わっているのでは、と思う。

東欧の生活必需品不足は申告だが、プラハの街だけは、店先の缶詰、菓子など、それなりに種類も数もそろっていた。「旧市街広場」では、ヤミ両替を求める人を振りはらうのに面倒なくらいだ。警官隊との衝突で死んだ学生を悼み街角にろうそくが供えてあり、その火は絶えることがない。

それにしても新大統領の人気は相当なもので、街じゅういたるところ、観光地にまで、「ハベルをお城へ」（すなわち、大統領に）というポスターが見られた。平静に戻り、買い物客であふれる夕刻のバーツラフ広場は目に焼きついている。「百塔の街」といわれるこの美しいプラハに、かつて戦車が進入したのは、ひどく野蛮な行為に思われた。

最後の訪問地はウィーンだった。店先にあふれる電化製品、街じゅうの広告・看板、高い物価など、今回の旅行では始めて接するものばかりで、「西側へもどった」ことを肌で感じられた。

ヨーロッパには、１０００年以上の歴史が、そのまま「まちづくり」へつながっている都市がたくさんある。横浜はやっと百数十年。都市の歴史としてはまだ赤ん坊のようだ。私たちはそこにどんな「まちづくり」の種をまくことができるのだろう？　幼少の頃から道を誤らせたくないものだ。

『まち研』とのかかわり

都市計画局金沢八景駅東口開発事務所　松下　由佳

まちづくり研究会の所属会員の数の多さと幅の広さに現れているとおり、各会員と「研究会」の関わり方は、人によって様々なのだと思っています。私はお話しをさせていただく幸運に恵まれましたが、その話自体が下手だったとか何かということより（勿論それもありますが）、私自身が考えていることに整理をつけるのに役立ちまして、まちづくり研究会との関わり方にはこんなものもあるのだと感じることができました。

私の関わっているのは、区画整理、再開発事業の初動期で、地元権利者のうちで権利を整理して一戸建て住宅を取得するのが望ましい人がぽつりぽつり移ってきている、通称「住宅用代替地」の景観誘導についてです。開発のアミがかかってしまい、やむなく（？）権利調整をした人々に、今度は、壁は、屋根は、塀はこうしましょう、とさらに御協力を願うと言えば聞こえは悪いのですが、地価も高く交通も便利な駅前に運良く住んでいたのだから、まちの「顔」になるという自覚くらいは、是非持っていただきたいのです。

1989年春には、行政はどのような姿勢をとるべきなのか、などを考えており、自分の置かれている立場の全貌が見えているつもりになって話をしていたのですが、今思えばそんなことはなく、当時わからないのが当然だぐらいに思っていたことが、その後いろんなことがあるうちに目の前のうろこがはがれ落ちるようによく見えるようになってきました。よく言われることですが、「何をするべきか」の前には「何をなし得るのか」があり、そこに至るには、表向きにはあまり言いたくない自分の側の弱みとか過去の経緯とかを知っていなければならない、と身を持って経験しました。研究会の時、答えられなかった質問の答えも見つけられたと思います。研究会で話題になった時にもっと掘り下げていたら答えに至るのが早かったかも知れません。というより、そうすることがこの時の会の主旨だったのでしょう。この住宅用代替地のことは、今では一応筋の通ったシナリオになっていますが、もう一年たった時どう感じられるかは、今はわからないことです。

誰かが自分の仕事のことを話すのを聴くとき、疑問に思ったことは、怖いもの知らずとそしられるのを恐れずに素直になげかけてみるのも大切かと今では思っています。

まちづくり研究会の、１０年間の活動を支えてきてくださった方々と、メンバーの皆様に、深く感謝申し上げます。

豊田市から『まち研』に参加して

豊田市福祉課　伴　幸俊

私が、『まち研』のことを知ったのは、８９年１月地方自治職員研修という月刊誌に、全国自治体の自主研究グループを紹介するシリーズで、横浜市の『まち研』が掲載された時のことです。その頃、私は豊田市のごく小人数の勉強会で、まちづくりを語る（愚痴る？）機会はありましたが、『まち研』発足からﾖｺﾊﾏ・ﾌﾗｯｼｭ、本牧ＣＡＴＶなどの記事を目にしたとき、「何だこれは！こんなことが本当にやれたのか？」という衝撃にかられました。とにかく一度会ってみたい、話してみたいと思い、８９年７月、石田さんをはじめ、田口さん、仲原さん、内藤さんに会うことができました。皆さんの話しからは、まちづくりに対する熱意と自信を感じました。しかも楽しんでそれをやっている。それはグループでまとまって何かをやろうというより、自己の仕事の中で、自分を磨きながら、自分のやりたいことをやっていくというもののような気がしました。

その後、『まち研』に参加し、他のメンバーから話しを聞くなかで、横浜市という巨大な組織（職員数は豊田市の１０倍）において、『まち研』のメンバーが『まち研』に何を求めているのか、まちづくり研究会とはどうあるべきかなど勝手に創造したりしています。・・・『まち研』の二次会で、一部のメンバーがお互い名刺を交換していましたが、豊田市のような小さな都市では、あまり考えれない光景でした。

私自身、横浜市の『まち研』を知ったことが、自分の中で自治体職員として、ひとつの大きな起爆剤になっていることは事実です。今年で『まち研』が十周年を迎えるとのこと。ここまで、引っ張ってきたコアメンバーの努力に敬服するとともに、今後も継続してユニークな活動を期待しています。

まちづくり研究会名簿

企画調整機能　自治体タテ割り行政を実質的・有機的結び総合調整するヨコ糸的役割もち、これにより自治体の主性・総合性・実践性を発揮させ機能のこと。戦略プランナー、ロデューサー、プロモーター、ーディネーター、デザイナーなの能力を有する総合的なプラン一組織である。現在この名称の織を持つ自治体はいくつかある実態はさまざまである。財務・事部門、都市計画部門から独立せることによって初めて機能が分に発揮される。

掲載紙抜粋

ライトアップ　都市にある歴史的建造物、モニュメント、噴水、庭園、橋、街路等を照らし出し、夜の都市景観を演出すること。都市の照明は、フランスのルイ一四世時代に、安全性、生活時間や空間の拡大と共に当初から都市景観の演出を目的として始まった。電力による本格的都市照明は、一九二〇年代にパリに始まり、三〇年代には、電力会社の支援によりヨーロッパ各地に広がった。日本では、商業施設の照明は過度ともいえる状況であるが、欧米のように都市の夜景演出を目的とした照明方法は取られなかった。しかし、近年各地で夜の景観的魅力の創造と賑わいづくりのためにライトアップの実験的な試みが行われ、社会に定着しつつある。闇に浮かぶ歴史的建造物の荘厳な美しさは、人々に新たな感動を与え、この効果を歴史的建造物保存運動に結びつける成果を上げている。しかし、建物と街並みとの関係を無視したもの、一律的な照明技術により安易に行われているもの等、都市の景観を無視したものもある。（『都市景観照明』）